

2014 Vol.4

# GLOCAL

大学開学50周年  
記念号



## 国際人間学研究科の歩みと教育の理念・目標



国際関係学

- 国際関係学専攻の特色「境界」を越えるアプローチ ————— 高 英求
- 国際関係学専攻での学びと教育 大学院生と教員へのインタビュー
- 中部大学大学院で学んだこと ————— 桃井治郎



言語文化

- 言語文化専攻の特色 広大な人文知の海を軽やかに航る ——— 嘉原優子  
ヤーツコラ伊勢井敏子  
和田伸一郎  
岡本 聡



心理学

- 1. 認知心理学研究の現在と将来の夢 ————— 水野りか
- 2. 社会心理学研究の現在と将来の夢 ————— 高比良美詠子
- 3. 臨床心理学の過去・現在・将来の夢 ————— 願興寺礼子



歴史学・地理学

- 歴史学・地理学専攻の特色とこれから  
6年間の教育・研究活動を振り返って ————— 篠宮雄二
- 日本の「歴史認識」とアジア各国の「歴史認識」  
—アジア各地でのフィールドワークの経験から— ————— 山元貴継
- 中世日本の政治と権力の研究から ————— 水野智之

# GLOCAL

GLOCALは、GLOBALとLOCALを組み合わせた造語であり、地球規模でのグローバルと身近なローカルを、ともに等しく重視する考え方を意味しています。



## ごあいさつ

中部大学大学院、国際人間学研究科レポートGLOCAL Vol. 4をお届け致します。

本冊子GLOCALを創刊しましたのは2012年10月。これまでに3回発行し、今回が4回目になります。世の中には“3号雑誌”という言葉があり、雑誌を創刊してもその多くは3号までで消えていくという意味で使われます。これは、戦後まもない日本で創刊された多くの雑誌が3号あたりでGHQの検閲を受けたためそのあとが続かなかった、あるいは創刊号の売れ行きが第3号を発行する頃にはっきりするため、その結果を見てその後の刊行をあきらめた、などといったことに由来するといわれます。今回、GLOCAL Vol. 4を発行したことで、こうしたジンスをなんとか乗り越えたのではと胸をなでおろしております。国際人間学研究科レポートGLOCALは、Vol. 5、6と続けて発行していく予定ですので、今後も引き続きご愛読いただきたいと思います。

さて、本年2014年は、中部大学の開学50周年という記念すべき年にあたります。50年、100年という歳月の積み重ねはやはりずしりと重く、これを機にこれまでの軌跡を振り返りながら、今後、進むべき行く末に思いを馳せることには意義があると思われます。開学50周年という長い年月と比べますと、大学院国際人間学研究科の歩みは、まだその半分程度の歴史しかありません。しかしながら、この間に国内外で起こった幾多の出来事を考えますと、それまでの25年とその後の25年では大きく異なるように思われます。1980年代末の冷戦体制の終焉とともに本格化した社会・経済のグローバル化や、1990年代中頃から普及し始めたインターネットによる情報化の影響を受け、大学・大学院における教育・研究状況は大きく様変わりしました。

国際人間学研究科は、こうした時代の変化に対して適切に対応することが求められております。今号では、本研究科の教育理念、教育目標、ならびに各専攻における教育・研究の現況を掲載致しました。本研究科は、国の壁をやすやすと越えて広がる社会、経済、文化のグローバル化の動きを正面に見据えながらも、同時に、場所や地域に根ざしそこから立ち上がってくるローカルな現象にも目を向け、文字通りGLOBAL、LOCAL両方の視点から情報を発信していきたいと考えております。小誌GLOCALを通して、本研究科の教育、研究に対するご理解がよりいっそう深まりますことを期待致します。

2014年2月15日

林 上 (中部大学国際人間学研究科長)



# 国際人間学研究科の歩みと教育の理念・目標

## 国際人間学研究科の歩み

中部大学は、2014年に開学50周年を迎えます。1964年の開学以降、新学部、新研究科がつぎつぎに設置されましたが、国際人間学研究科は、この研究科が設立された際に基盤となった学部、すなわち中部大学の国際関係学部と人文学部に所属するスタッフを中心に設けられ、今日に至っています。

その歴史を振り返りますと、まず、1984年に中部大学に設置された国際関係学部を基礎として、1991年に前身である国際関係学研究科・国際関係学専攻が設けられました。国際関係学研究科は、その後、1998年に設立をみた人文学部と既設の国際関係学部を基礎とする新たな研究科組織、すなわち現在の国際人間学研究科へと引き継がれます。それは2004年のことで、この新研究科の設立にともない、先行する国際関係学研究科は2009年に廃止されました。

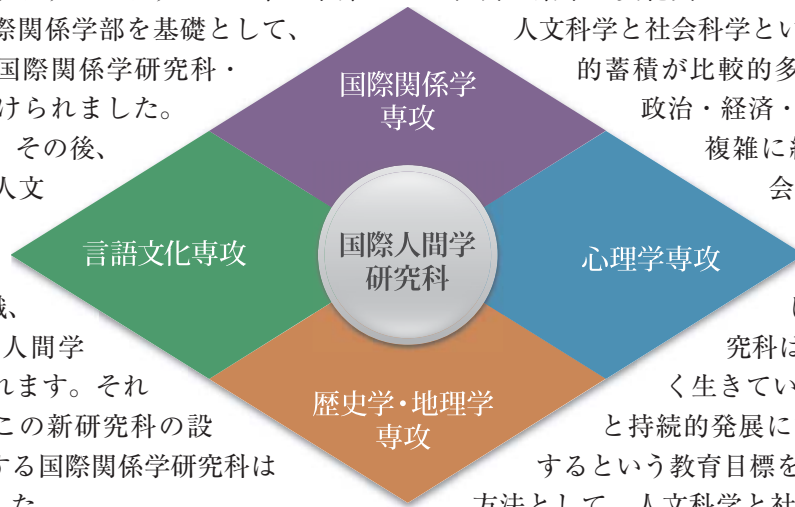
国際人間学研究科は2004年の設立当初、国際関係学、言語文化、心理学の3つの専攻によって構成されていましたが、人文学部に歴史地理学科が設けられたのにもない、2008年には歴史学・地理学専攻が4番目の専攻として加わりました。20世紀末から21世紀初頭にかけて設立され拡充をみてきた本研究科は、東西冷戦体制が崩壊してグローバル化が本格化していくまさに激変の時代に生まれ、その歩みを開始したといえます。

## 教育理念と教育目標

本研究科の教育理念は、人類社会が抱える種々の課題を統合的に把握する視点と方法を見いだす点にあります。やや抽象的ですが、グローバル社会を多面的に理解し、問題解決の糸口を見出すことを使命と考えます。「国際人間学」という旗印の下、民族・国家・人間環境に関わる諸問題に立ち向かい、国際社会の繁栄と文化共生のための道を追い求めます。

人文科学と社会科学という、科学の中でも学問的蓄積が比較的多い研究分野を拠点に、政治・経済・文化・環境の諸要素が複雑に絡み合うグローバル社会を生き抜く道を幅広く探っていきます。

こうした教育理念に近づくために、本研究科は、国際社会を人間らしく生きていける人材、社会の平和と持続的発展に貢献できる人材を育成するという教育目標を掲げます。そのための方法として、人文科学と社会科学を基盤とする国際人間学の領域において主体的に学び、修了後は社会で幅広く活躍できる人材を育てるのにふさわしいカリキュラムと指導体制を用意しました。国際人間学は、グローバル社会で今後ますます重要度を増していく学問です。国際人間学研究科は、高度専門職業人や研究者の育成を通して社会からの要請に十分応えられるよう、教育・研究の両面で努力を致します。



## こんな人材を育てたい - 各専攻の教育目標 -

国際人間学研究科の4つの専攻では、それぞれ以下のような人材の育成を教育目標として掲げています。

	国際関係学専攻	言語文化専攻	心理学専攻	歴史学・地理学専攻
博士前期課程	① 政治、経済、社会、文化に関する知識をもとに、国際協力、社会開発、平和構築、地球環境などの現代的諸課題に対して幅広い視野から取り組むことのできる専門的職業人 ② 多様な人類文化・社会や民族・国家がもつ社会文化的特性の普遍性と特殊性に配慮しながら国際的に活躍できる専門的職業人	① ジャーナリズム、英語圏言語文化、日本語日本文化の学問的領域で独創的研究を成し遂げ、学術的に貢献できる専門的職業人 ② 日本語、日本文学、日本文化の知識・理論を修得し、教育・学芸などの分野で活躍できる専門的職業人	① 教育心理学、認知心理学、社会心理学、発達心理学、臨床心理学、障害児心理学などの分野で社会的に貢献できる人材 ② 学校心理学を中心に専門的知識をもとに教育現場で幅広く貢献できる人材	① 世界的スケールで展開されてきた歴史的事象や日本国内において歴史的に繰り返られてきた現象をよく理解し、社会や教育の場で生かせる専門的職業人 ② 様々な地域的スケールで生じている社会、経済、文化的現象を空間的に理解でき、それを社会や教育の場で生かせる専門的職業人

	国際関係学専攻	言語文化専攻	心理学専攻	歴史学・地理学専攻
博士後期課程	① グローバル社会の政治・経済を十分に把握し、理論と実践の両面から問題解決にアプローチできる人材 ② グローバル世界において社会文化的課題を理解し、人間社会の開発に対して理論的・実践的に取り組める人材 ③ 人文・社会科学の観点から隣接諸科学の研究成果を吸収し、「国際人間学」の学問的地平を切り開くことのできる人材	① ジャーナリズム、英語圏言語文化、日本語日本文化の学問的領域で独創的研究を成し遂げ、学術的に貢献できる高度な専門的職業人 ② ジャーナリズム、英語圏言語文化、日本語日本文化の領域で修得した専門的能力を生かし、地域社会や国際的舞台上で指導力が発揮できる専門的職業人・研究者	① 心理学領域に関する専門知識をもとに研究を深め、当該領域の学問的発展に貢献できる人材 ② 仮説演繹能力と最新の研究方法にもとづく分析能力で新たな研究分野を切り開いていける人材 ③ 現代社会で人間が直面する種々の心理学的課題に専門的立場から取り組み、社会的に貢献できる人材	① 世界的スケールの歴史的事象や日本国内において歴史的に繰り広げられてきた種々の現象を深く究明し、その研究成果を社会や教育の場で生かすことのできる専門的職業人・研究者 ② 様々な地域的スケールで生じている社会、経済、文化的現象を空間的方法によって追究し、その成果を社会や教育の場で生かせる専門的職業人・研究者

## こんな学生の入学を歓迎します - アドミッションポリシー -

国際人間学研究科の4つの専攻では、それぞれ以下のような学生の入学を待ち望んでいます。

	国際関係学専攻	言語文化専攻	心理学専攻	歴史学・地理学専攻
博士前期課程	① 国際的な政治経済や社会文化に対して関心があり、国際協力、社会開発、平和構築、人権問題、地球環境問題の諸分野、あるいは民族・国家の社会文化的特性に関わる分野で知識を深め活躍したいと考えている人 ② 国際的諸課題に対する知的好奇心が旺盛で、課題の究明・解決のために学問的成果を成し遂げ、その成果を社会に還元して自ら貢献したいと強く思っている人	① ジャーナリズム、英語圏の言語文化、日本語日本文化に対して関心があり、専門的知識、理論、応用力を修得して社会的に貢献したいと考えている人 ② 実践的なメディア操作、英語学・英米文化学、英語教授法を含む応用言語学、日本語・日本文学、日本語教育の分野で能力を高めたいと考えている人	① 教育心理学、認知心理学、知覚心理学、社会心理学、発達心理学、臨床心理学、障害児心理学、健康心理学などに関心があり、専門知識の修得と分析能力向上に意欲的な人 ② 一般社会や教育の分野で心理学の知識を生かし、心理学的側面から組織や社会の発展に貢献したいと考えている人	① 世界各地で生じてきた歴史的事象や日本各地で歴史的に繰り広げられてきた種々の現象に対して興味があり、専門的な学問究明によって歴史的真相に迫りたいと強く思っている人 ② 種々の空間的スケールで行われている人文現象あるいは自然的営力による諸現象に対して深い関心があり、学問的方法によって空間的現象のメカニズムを究明したいと強く思っている人
博士後期課程	① 国際的な政治経済や社会文化に対して関心があり、国際協力、社会開発、平和構築、人権問題、地球環境問題の諸分野、あるいは民族・国家の社会文化的特性に関わる分野で深めた知識を体系的に整理し、専門的な成果物としてまとめ上げたいと考えている人 ② 国際的諸課題に対する知的好奇心が旺盛で、課題を専門的観点から究明・解決する方法の創出に強い関心をもっており、社会的、学問的に大きく貢献したいと考えている人	① ジャーナリズム、英語圏の言語文化、日本語日本文化に関する基本的知識を有し、それをベースにさらに学問的観点から学識を深めたいと考えている人 ② 実践的なメディア操作、英語学・英米文化学、英語教授法を含む応用言語学、日本語・日本文学、日本語教育に関わる研究分野で新たな地平を切り開き、学問的に貢献したいと考えている人	① 教育心理学、認知心理学、知覚心理学、社会心理学、発達心理学、臨床心理学、障害児心理学、健康心理学に関する基本的能力が備わっており、さらにその能力を高めて社会や教育の場で生かしたいと考えている人 ② 心理学の専門領域で必要とされる最新かつ高度な知識・研究能力を修得し、当該領域の研究内容を深めることで学問的に貢献したいと考えている人	① 世界的スケールの歴史的事象や日本国内において歴史的に繰り広げられてきた種々の現象を深く究明し、その研究成果を社会や教育の場で生かすことのできる専門的職業人、研究者 ② 様々な地域的スケールで生じている社会、経済、文化的現象を空間的方法によって追究し、その成果を社会や教育の場で生かせる専門的職業人、研究者



### Profile

国際関係学専攻主任 国際関係学部 国際関係学科 教授

高 英 求 (こう よんぐ)

1962年生まれ。1991年に京都大学大学院経済学研究科博士後期課程を単位取得退学。九州国際大学経済学部を経て、2004年に中部大学国際関係学部教授となり、現在に至る。主たる研究領域は、国際金融論・国際貿易論。



## 国際関係学専攻の特色 「境界」を越えるアプローチ



### 目標と特色

国際関係学専攻の最大の特色は、「境界」を越えようとするアプローチにある、と言ってよいだろう。少なくとも私は、そのようにとらえている。

正確を期するために、国際関係学専攻の目標や特色について、大学院のパンフレット（『中部大学大学院』）にどのように書かれているか、見ておこう。

「グローバルな社会を政治経済学的、あるいは社会文化学的な視角で分析する能力を養うとともに、人間と社会の持続的な発展はどうあるべきかという研究課題に取り組んでいます。理論構築と現場感覚、思考力と応用力のバランスのとれた国際人、および研究者を養成することが本専攻の目的です。」

これを、もっと専門的な教育内容にからめて述べているのが、次の『学生便覧』（学生に配付される冊子）の文章である。

「政治学、経済学、社会学、人類学などを基盤として、理論と実際、思考力と応用力のバランスをとりながら、広く国際政治、国際経済、人類文化の諸問題、さらには同時代的な人間と社会の諸問題、平和構築、国際協力等の具体的・実践的な諸課題に取り組むことのできる高度専門職業人、有識社会人及び教

育研究者を育成することを目標とする。」

ここからも明らかのように、国際関係学専攻は、広い学問領域をカバーしている。さらにいえば、政治学・経済学・社会学・人類学が、いわば横並びの関係で置かれているのが、国際関係学専攻の大きな特徴である。

博士前期課程には、「国際政治経済研究コース」と「国際社会文化コース」という、2つのコースが設置されている。強いて言うならば、前者では政治学・経済学、後者では社会学・人類学の領域のウェイトが大きいが、学生はコースを越えて自由に科目を履修することができる。

繰り返しになるが、国際関係学専攻ならではの特徴は、「国際」という言葉にこめられている、国と国との「境界」を越えて人間と社会について考える指向性にある。

そしてこのことは、学問的アプローチについても言える。すなわち、上で見たように、学問の「境界」を越えようとするベクトルを、私たちはもっているし、学生にそれを可能にするようなカリキュラムを提供していると自負している。

もちろん実際には、大学院生たちは研究テーマを絞り込み、指導教員のもとで、専門性の高い研究をしていくことになる。それでも、主指導1名と副指導2名の専門領域が同じ、ということはあまりなくて、タコ壺的な世界に閉じ込められることはない。それが専

門性の弱さ（あるいは「薄さ」）につながる怖れがないとはいえないが、方法論・領域の広がりというメリットによって、そうしたデメリットを十分に補えるように思う。

『GLOCAL』の第1号にも書いたのだが、こうした特徴が最もよく表れるのが、国際関係学専攻のオムニバス講義である。たとえば「研究方法論」という講義では、さまざまな領域の研究者が、それぞれの方法論を語る。たとえば、「国際法の研究方法」、「フランス社会の研究方法」、「国際協力の研究方法」、「経済学の方法論」といった具合である（後ろのインタビューを参照されたい）。

### 国際関係学専攻の歴史と現状

国際関係学専攻は、1991年に国際関係学部を基礎として設立されており、約四半世紀の歴史をもつ。もともとは国際関係学研究科の中の専攻であったが、2004年に国際人間学研究科が誕生し、現在はその中の専攻の一つである。

専攻の目標として、まず「高度専門職業人、有識社会人」の育成が掲げられており、その方面で実績を上げてきたのはもちろんことであるが、あわせて優れた研究者を輩出してきたことは、国際関係学専攻が誇ってよいことであろう（後掲の桃井治郎氏の寄稿文を参照されたい）。

現在（2013年度）、国際関係学専攻には、

博士前期課程に9名、博士後期課程に3名の大学院生が在籍している。

後のインタビューからも分かるように、大学院生の構成も多様である。中部大学の国際関係学部から大学院の国際関係学専攻に進んだ人もいれば、はるばる海外から中部大学の大学院を選んできてくれた留学生もいる。また、強い向学心をもって大学院に入学した社会人の方もいて、お互いに刺激を与えあっている。

留学生が多いことは、開設時からの特色である。これまでの留学生の出身国は、中国、ベトナム、タイ、ネパール、インドネシア、韓国、フィリピンなど、実に様々である。中には、後のインタビューにあるように、国際関係学専攻の卒業生が母国の大学に就職し、その教え子がまた本専攻に留学してくれた、というケースもある。

この専攻の性格からして当然のことであるが、大学院生の研究テーマは様々である。在学中の大学院生のテーマを見ても、「中国における日系企業の戦略」、「アメリカの対外債務問題」、「ネパールにおける女性の就業機会」、「日本在住の外国人女性たちの化粧文化」、「木曾川における川祭り」など、実に多彩である。

つい先日、修士論文の構想・概要発表会があったばかりだが、こうした多様な研究が大学院生によって報告され、活発な議論が行われた。この発表会には、大学院に関心をもつ数名の学部学生（1年生も含む）も参加してくれた。熱心に聞き入っていたばかりでなく、議論にも加わってくれたのがうれしかった。

また、年度末には、修士論文の公開審査が



修士論文構想・概要発表会（2013年度）

行われる。しばらく前から、専攻の単独開催ではなく、国際人間学研究科全体で実施するようになったので、ますます研究報告の範囲が広がった。

異なる領域の報告を聞くことは、大学院生にとってだけでなく、教員にとっても刺激的である。私たちは、こうした報告会を通じて、知らず知らずのうちに、「耳学問」的に知識・思考の幅を広げているのだろう。



修士論文の公開審査（2012年度）

## 今後の展望

世界に目を向けると、大学院での教育（そして大学院の学位）に対するニーズが高まる傾向がある。ひるがえって日本国内の状況を見ると、少なくとも文系の大学院教育については、社会的な関心が高いとはいえない。これは何よりも、日本においては、文系大学院への進学が、企業への就職において有利に働きにくいからであろう。しかも、教育・研究職のポストは限られており、かなり前からオーバー・ドクターの増加が深刻な問題になっている。

大学側の努力だけでは、問題の根本的な解決は困難であるが、それでも日本の大学院のあり方には、まだまだ大きな可能性が秘められている。国際関係学専攻でも、新たな方向性を探っていきたい。

国際関係学専攻の今後の展望についていえば、後のインタビューに登場する中井法子さんが一つのモデルになるだろう。中井さんは、中部大学の国際関係学部から国際関係学専攻に進学した。学部時代に2回、大学院時代に2回、合計4回にわたって中国に留学している。すべて中部大学の提携校（外交学院とハルピン理工大学）である。

中井さんが利用した、「大学院生海外研究指導委託支援」という制度は、新設されたばかりで、中部大学からの渡航費などの支援を得て、在学中に外国の大学で指導を受けることができる、というものである。中井さんは、この制度のもとで、中国の大学で指導を受けるとともに、並行して現地での調査を行った（中国における日本料理の研究）。

このように、大学院での学びを、それぞれ「境界」を越えたかたちで行うことは、私たちの目指すべきあり方の一つだろう。「グローバル人材」ということがよく言われるが、それを中身のあるものとするためには、外国語の運用能力に加えて、外国（および日本）の社会・文化を深いレベルで知る、ということが必要だと思われる。中井さんの後に、多くの院生が続くことを期待している。

社会の要請に応えるということは、もちろん企業のニーズに対応することも含むが、それだけではないだろう。言うまでもなく、大学は研究を核としなければならない。そのうえで、留学生からのニーズに応えることも必要だし、社会人の「もっと学びたい」という強い要望に応えていくことにも、これまで以上に真剣に取り組まなければならない。

誰よりも切実に、そして純粋に「学び」を希求しているのは、実は社会人の方たちなのかもしれない、と感ずることがある。西欧の学問の発展の基底に、「アマチュア」の存在があったとは、よく言われることである。学問は大学に在籍する研究者だけによって担われるのではない。大学は、学問そのもののためにも、社会人を広く受け入れ、そこから刺激を受ける中で、自身を検証して磨いていくべきなのだろう。

後掲のインタビューを行う中で、強く印象に残ったのは、大学院に進学してくる人たちの、「より深く学びたい」、という熱い思いである。大学は何よりも、研究の広がりや深化を通じて、そうした強い願いに応えなければならない。

国際関係学専攻での学びと教育

## 大学院生と教員へのインタビュー



### 大学院生に聞く

中井 法子

国際関係学専攻 博士前期課程2年



北京にて 外交学院の先生・クラスメートと

○中井さんは、中部大学の学部（国際関係学部）と大学院（国際人間学研究科）で、4回も留学されているそうですね。

●そうなんです。中部大学の学部と大学院を通じて、一番よかったと思えるのは、やはりこの留学経験ですね。

中部大学の国際関係学部に入學して、すぐに中国に魅力を感じるようになり、1年生の夏に、短期研修で外交学院（北京）に行きました。外交学院は、中部大学の提携校です。そして、3年生のときに、やはり中部大学の提携校である、ハルビン理工大学に、1学期間留学したんです。

大学院に進んでからは、修士課程の1年目を終えた後、また外交学院に1年間留学しました。

私は、中国における日本料理について研究しているのですが、北京を拠点にして、現地の日本料理店でインタビュー調査をすることができました。外交学院の先生方にご指導をいただくとともに、学部生や院生の友人たちにも、ほんとうにいろいろとたすけてもらい

ました。

そして、修士課程2年生の夏の終わりに、もう一回、外交学院に行きました。今度は、中部大学で新設されたばかりの、「大学院生海外研究指導委託支援」という制度を利用しました。中部大学から渡航費などの支援をいただいて、外国の大学で研究指導をしてもらえる、という夢のような制度です。私が初めての利用者だったそうです。

結局、中部大学に入ってから、学部時代とあわせると4回も留学しています。それも、すべて中部大学の提携校です。私ほど、中部大学で留学制度をフルに活用した人はいないかもしれない（笑）。

修士論文も、学部時代の卒論テーマの延長線上で書いています。学部ではやりきれなかったことを、大学院に進んで追求している、という感じでしょうか。

### チャン・マイ・トゥイ

国際関係学専攻 博士前期課程1年



中部大学の入学式

○チャン・マイ・トゥイさんは、ベトナムの大学をご卒業後、今年の春にこちらに入學されましたが、中部大学はいかがですか？

●中部大学の国際人間学研究科は、ほんとうによいところですよ。先生方が親切に指導して下さいます。また、図書館がすばらしく、院生室などの施設・設備も充実しています。

今、メーワルト先生（社会学）のご指導をうけて研究していますが、学部のゼミにも参加させてもらっています。この夏には、ゼミの日本人学生が2人、ベトナムに来て、私の実家に泊まったんですよ。

私の研究テーマは、「在日ベトナム人妻と日本人夫の国際結婚」、というものです。聞き取り調査をしています。このテーマは、ベトナムにも先行研究がほとんどなくて、苦労もありますが、研究が楽しくてしかたありません。毎日のように大学に来ています。

とても気に入っている講義として、オムニバス講義（「研究方法論」「臨地研究論」等）があります。こういうタイプの講義は、私が行っていたベトナムの大学にはありませんでした。先生方が順番に担当されますが、それぞれのよいところをもらえます。

日本語には苦労しますが、先生とお話することが勉強になります。それに、大学の日本語教育センターで、「日本語論文の書き方」という講義をとっているのですが、これが日本語の上達にとっても役に立ちます。

この大学院を勧めて下さったのは、ベトナムの大学での恩師です。実はその先生は、中部大学国際関係学研究科（当時）の卒業生なんです（グエン・ティ・フォン・チャー先生、フエ外国語大学・日本語言語文化学科・学科長）。それと、大学の先輩であるグエン・ティ・トゥ・スーンさんも、やはりこの卒業生で、中部大学への進学を勧めて下さいました。ベトナムの後輩たちからは、どうしたら中部大学に行けるのか、と聞かれるんですよ（笑）。



国際関係学

翁 由美子

国際関係学専攻 博士前期課程2年



オランダのキューケンホフ公園にて

○翁さんは、まず社会人聴講生として中部大学で学ばれ、その後、大学院に進まれました。大学院はいかがですか？

●第二の青春ですね（笑）。こんなに充実した日々は、もうないんじゃないかと思うほどです。何より、知的な面白さがあります。これまでの固定概念が崩されていく楽しさ、といえばよいでしょうか。何にもかえがたい経験です。思っていたより、ずっと面白いです。

英語文献を検索して、自分の論文に必要な文献を探し出すのは、実にエキサイティングです。私は今、「アメリカの対外債務の増大とソブリン・リスク」を研究テーマにしていますが、ヘレン・トンプソンというイギリスの研究者の論文を探し当てることができました。彼女はピカイチですね。

もともと私は、聴講生として中部大学の講義を受けていて、大学院で勉強しようと思ったのです。短大卒だったので、まず別の大学に編入学して、そこを卒業してから、こちらの大学院に入りました。

大学院に行きたい、と思ったきっかけの一つは、国際関係学部で国際法・国際組織論を教えていらっしゃる中村道先生の講義を受けたことでした。数年前にお亡くなりになったのが、とても残念です。中村先生はもの静かな方でしたが、毅然としていらっしゃって、学問への情熱がこちらに伝わってきました。

でも、大学院に入って、思っていたよりつ

らかった、という面もあります。文章を書く、論文を書くというのは、難しいものですね（笑）。今までに経験したことがない種類の苦しみを味わっています。修士論文はつらいです。どこにいても、いつも頭の中にあります。完成したら、最高にうれしいでしょうね。

教員に聞く

戸田 優男

国際関係学部 教授  
 （計量経済学、労働経済学）



エジプト・カイロにて 1995年  
 中小企業振興についての研究発表

○戸田先生は、中部大学国際関係学部の設立時からのスタッフで、大学院でも長く専攻主任をされました。振り返ってみて、いかがですか？

●思い出深いですねえ。今は国際人間学研究科ですが、当初は国際関係学研究科でした。

ここの大学院には、発足当初から、院生が情熱をもって真剣に研究に取り組み、お互いに支え合う、よい雰囲気があったように思います。

教員と学生のつながりも強かったですね。院生の研究発表会には、教員がほぼ全員出席しました。院生の報告に対しては、よい意味で厳しいコメントが寄せられ、飲み会に行っても、学問的なディスカッションをしたものです。

国際色も豊かで、これまでに、ベトナム、

インドネシア、ネパール、モンゴル、中国など、様々な国から大学院生が来てくれました。院生の研究室をたずねると、自分の出身国のお菓子をくれたりしてね（笑）。インドネシアからきた留学生から、来日した自分の父親を紹介されるなど、まさに「国際」という感じがしました。国際関係の大学院には意味があるなあ、と思ったことでした。これはとても大事なことです。送別会も盛り上がりました。

当時は、大学院生が今よりも多くて、院生研究室のある20号館6階がにぎわっていました。その中に、現在、中部大学の教員となっている、桃井治郎さんや宗ティンティンさんもいました。この大学院で学んで、研究者になられたのです。

澁谷 鎮明

国際関係学部 教授  
 （韓国地域研究、人文地理学）



○これまでに留学生を何人も指導してこられましたね。

●私は韓国の研究をしています。そのためか、中国の朝鮮族の人が次々に来ましたね。

強く印象に残っているのは、一番最初に指導した人です。結局、博士論文は書けなかったのですが、日本の会社から3つも内定をもらいました。彼は、中国語・韓国語・日本語という3つの言語ができるんです。運輸業に就職して、今は名古屋港でタンカーの荷下ろしに関わる仕事をしています。タンカーに何が積んであるのか、荷下ろしの際に分かっていないといけい訳ですが、彼は三ヶ国語ができるので、意思疎通がスムーズにできる。会社でとても大事にしてもらって、楽しく働

## 国際関係学

いているようです。

私の夢なのですが、いつか留学生を含めた大学院の同窓会をつくりたいですね。要望はあるんじゃないでしょうか。中国支部やネパール支部などができるといいですね。

日本に来る留学生の中には、母国に帰って、日本と関係する企業で勤務している人たちがいます。自分で起業して、日本に研修生を送り出す会社で働いている卒業生もいます。もちろん、日本の企業に就職する人もいます。私の知っている院生は、日本の証券会社の系列会社で働いています。

こうした人たちのためにも、同窓会とかたちのネットワークをつくれたら、と思うのです。

## 中山 紀子

国際関係学部 教授  
(文化人類学)



イスタンブルの街角にて

○指導された学生が、昨年に博士号をとりました。博士論文の指導はいかがでしたか？

●おもしろかったですよ。昨年に博士号をとったT君の場合、私の専門領域であるトルコに関する論文だったので、私自身にとっても興味深かったです。トルコ国内のウイグル移民集団に関する研究だったのですが、私が会ったことのない人たち、私の知らないトルコについて、学ぶことができました。

審査では、宮本正興先生と堀内勝先生（お二人とも中部大学名誉教授）が、実に懇切丁寧なコメントをよせてくださいました。こうした大御所たちが、T君の論文をおもしろがって下さっただけでなく、公開審査会では他の

参加者も、和やかな雰囲気の中で、たくさんの質問やコメントをよせてくれました。うれしかったですね。

学生の指導をしていて強く思うのは、「他流試合」の大切さです。院生にも学部生にも、「外に行け」といつも言っています。T君は、よく外に他流試合に行きました。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所が主催した、イスラーム研究を目指す院生のための教育セミナーに参加したり、日本中東学会で発表したりしました。

私自身、学生時代に外に出ることの必要性を感じていました。よその大学の授業に出たりしましたよ。違う雰囲気を知ることは大事です。私は、大阪外国語大学で修士課程を終えた後、総合研究大学院大学（国立民族博物館）の博士課程に行きました。そこで開かれていた「論文ゼミ」が、とても自分のためになりました。様々な分野の研究者と院生が参加するのですが、自分とは違う専門領域をもつ人々にも分かってもらえるように話さなければなりません。難しかったですが、とても勉強になりました。

学生を外に行かasetたいですね。狭い世界に閉じこもっていたらダメです。これまで指導してきた院生は、中部人類学談話会などで発表してもらいました。学生同士で企画を立てて、何かあったっていいじゃないですか。

## 杓谷 茂樹

国際関係学部 教授  
(文化人類学)



メキシコの子チエン・イツァ遺跡公園にて

○指導された学生が、メキシコの大学で活躍していますね。

●博士後期課程に在籍していた金澤雅子さんが、メキシコのグアナファト大学で、日本語教員の職を得たのです。今年に入って決まったのですが、向こうで生き活きと働いているようです。

もともと金澤さんは、「メキシコの建築におけるイスラムの影響」という、たいへんユニークなテーマで研究を進めていました。度々メキシコに渡って、現地調査を行い、滞在歴はかなり長期にわたります。今は新しい仕事で忙しいようですが、研究を続けて博士論文を早く完成させてほしいものです。

最近、金澤さんのように自分で研究やネットワークをマネジメントできる人が、以前よりも少なくなってきたような気がします。私は、修士（博士前期課程）に入った学生に、「まず名刺をつくりなさい」、と言います。大学院生であっても、一人の「研究者」なんだ、という意識をもってほしいのです。

私自身は、学部を卒業して会社勤めをした後に、大学院に入りました。とても楽しかったですね。学部時代は、「勉強させられている」というような気持ちでしたが、大学院に入ってから、「自分で工夫して勉強している」という実感がありました。ラテンアメリカの研究者が大学に少なかったので、外に出てあちこちに教えてもらいにいきました。

それから、大学院生同士で、よく話をしましたね。頻りに飲みに行きましたし、朝まで議論をすることもありました。今の院生も、院生同士でよく話してほしいですね。様々な分野の人と話すことで、世界が広がっていきますし、知識がつながっていくのですから。



学位記授与式にて

Profile

人文学部共通教育科 講師

桃井 治郎 (ももい じろう)

1971年生まれ。中部大学大学院国際関係学研究科中退。博士（国際関係学）。2011年より中部大学講師。主たる研究領域は、国際関係学、マグレブ研究。著書に、桃井治郎・玉田敦子編（2013）『近代と未来のはざままで』風媒社。



## 中部大学大学院で学んだこと



### 大学院進学への二つの理由

中部大学大学院国際関係学研究科（現・国際人間学研究科）に進学したのは、今から10年以上前の2002年4月である。筆者は、それまでの2年間、北アフリカのチュニジアで青年海外協力隊員として活動し、帰国したところであった。

そもそも、大学院に進学しようと考えたのは、「真面目な」理由もあったが、もうひとつ「打算的な」理由もあった。真面目な理由からいえば、日本とチュニジアの経済格差について自分なりに学び、考えてみたいという思いからである。

もうひとつの打算的な理由のほうは、個人的な進路と関係していた。チュニジアから帰国したあと、国際協力の道に進みたいと漠然と考えていたのだが、その際、修士号取得が多くの場合のポスト公募の必須条件になっていたのである。大学院進学は、いわば修士号という就職活動のための免状取得が目的でもあった。

### 院生としての生活

帰国後、どの大学院に進学しようかと考えているとき、本屋でたまたま、峯陽一先生（現・同志社大学教授）の『現代アフリカと開発経済学』という書籍を見かけた。今から考えると、内容について充分理解できていたとは思えないが、それでも、「アフリカ」と「開発」という二つのキーワードが自分の興味と重なっていたため非常に印象深く、峯先生のい

る中部大学大学院に進学することにした。

さて、中部大学大学院に入学し、晴れて、峯先生のゼミに入った。ただし、中部大学大学院の良いところは、いろいろな先生から指導を受けられ、かつ少人数教育で行われることである。筆者は、峯先生のほか、阪上孝先生、立本成文先生、長島信弘先生、原田太津男先生、宮本正興先生、武者小路公秀先生、あるいは現在も中部大学にいらっしゃる河内信幸先生や田中高先生、中山紀子先生など多くのすばらしい先生方から指導を受けた。他大学で、これほどの先生方からごく少人数のゼミで指導を受けられる大学院はそうそうないのではないだろうか。

大学院では北アフリカの近代史を研究対象としたが、多くの先生方から指導を受ける中で自分の関心分野が広がり、なんでもかんでも興味のあることは勉強することにした。峯先生のゼミで読んだ内田義彦や、宮本先生のゼミで読んだウォルター・ロドネー、阪上先生のゼミで読んだカントなど、懐かしい思い出とともに、今の自分の学問的基礎を作っていると感ずる。

修士号取得が進学のひとつの目的であったが、大学院で勉強するうちに、研究というか勉強が楽しくてしょうがなくなった。先生方と相談して、修士論文を一年目に提出してもらい、二年目からは博士後期課程に進学することになった。そのぶん、朝も夜も休まず勉強したが、とにかくこうした柔軟な対応を取っていただいたおかげで、なんとか大学院での勉強を続けることができた。

### その後の進路

博士後期課程2年目の時、ゼミで指導を受けていた阪上先生よりお声がけいただいて、翌年より中部高等学術研究所（中高研）の研究員となった。都合上、大学院は中退しなくてはならず、結局、大学院には3年しか在籍しなかったことになるが、この3年間は本当によく勉強したと思う。ただし、苦労したというよりも、楽しくてあっという間に過ぎていった3年であった。

なお、中高研に移ってから3年目に博士論文を書き上げ、国際人間学研究科に提出して、博士号をいただいた。論文博士としては、同研究科第一号ということであり、山下学長から学長室で博士号授与されたのも、今ではとても良い思い出である。

結局、中高研には3年間在籍し、その後は、在アルジェリア日本国大使館で専門調査員として勤務した。アルジェリアでの滞在も計3年に及んだ。

そして、2011年4月より、職を得て、中部大学で教員として働くことになった。本職に就くまで、本当に多くの方にお世話になり、また、多くの幸運に恵まれたと感じるが、その出発点は、チュニジアから帰国後、中部大学大学院に進学し、研究の楽しさを知ったことにあると思う。現在、本大学院で学んでいる学生、あるいは、これから入学を希望する方には、ぜひ、存分に大学院生活を楽しんで勉強してほしいと思う。それに応える教員側の人材は豊富である。



## Profile

言語文化専攻主任 人文学部教授

嘉原優子 (YOSHIHARA Yuko)

関西大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。専門は宗教学・宗教人類学。博士（文学）。主著に『バリ島の村落祭祀と神観念』（2010,おうふう）



## 言語文化専攻の特色

広大な人文知の海を軽やかに航る



### 目標と特色

言語文化専攻は、国際人間学研究科に設置されている。国際人間学研究科は、国際関係学専攻、心理学専攻、歴史学・地理学専攻と言語文化専攻の4専攻から成るが、その中でも言語文化専攻は、言語と文化を基礎とする複合的・総合的な教育研究を行い、言語文化を体系的に理解した、有為な人間を育成することと多方面の研究を通じて、社会へ貢献することを目的としている。

博士前期課程では「ジャーナリズムコース」「英語圏言語文化コース」「日本語日本文化コース」の3分野を配置し、言語と文化のプロフェッショナルを養成するための体系的カリキュラムを設定している。「ジャーナリズムコース」では、ジャーナリズムの基礎的理論を身に付け、実践的なメディア特性にも通じた情報発信・受信の理論構築能力を養成する。また、複眼的な視点と国際的な視野を養い、多様化・グローバル化する高度情報社会においてジャーナリストとして通用する能力を育成する。「英語圏言語文化コース」では、英語そのものに対する理解を深める英語学、英語話者の文化的背景を学ぶ文化学、英語教授法を含む応用言語学の基礎理論を修得させる。また、英語英米文化に関して、高度な知識と教授技能を持った専門職業人として通用する能力を育成する。「日本語日本文化コース」では、日本語学、日本文学、日本文化の専門性を深め、対外的な発信能力を養成する。また、日本語教員、中学・高校国語科教員、学芸員等、高度な専門職業人としての能力を育成する。

博士後期課程では、メディア・コミュニケー

ション専門研究演習、英語圏言語文化専門研究演習、日本語文化専門演習を開講し、各分野の専門性、研究能力をさらに高める。専門能力を活かし、地域社会や国際的分野で企画力や指導力を発揮できる教育者、研究者、知識人を養成することが目標である。

### 言語文化専攻の歴史と現状

言語文化専攻は、平成16年に国際人間学研究科が設置されると同時に、その中に設置された専攻である。開設以来、多彩な教授陣によって指導が行われ、平成24年度までに26名の言語文化学修士を輩出している。ジャーナリズムコースでは情報産業・流通論、情報技術とメディアの過去・現在・未来、ジャーナリズムと倫理などの科目を、英語圏言語文化コースでは、応用言語学、英語教育法、英語学、英米文学、英語圏言語文化に関する科目を、日本語日本文化コースでは、日本語学、日本語教育学、古典文学、近代文学、日本文化、伝承文芸、日本芸能、国語教育に関する科目を開講している。言語文化専攻の特徴の一つは、日本語・日本文化に関心を持つ多数の外国人留学生が在籍することである。自国と日本の比較研究を通して、彼らの研究は学術交流の国際化と日本文化の対外発信に貢献している。

また、「国語」「英語」の中学校教諭専修免許状、高等学校教諭専修免許状の取得が可能であり、修了者の中には、研究を継続する傍ら、中学校、高等学校、大学および大学院において教育に携わる者もいる。日本語教員として国内外で活躍する者もいる。高度専門職業人

の輩出は、国際人間学研究科が目指すところである。

### 今後の展望

今後は、3コースがそれぞれの特徴を活かして一つのグローバルかつ近未来的な研究課題に取り組むことも期待される。

激しく移り変わり、自他の境界が揺らぐ現代社会において、確たる人文知とコミュニケーション能力を有し、言語と文化を通して、従来の固定概念から解放された異文化理解を達成するとともに、自らの文化を客観的に見詰め、正当に評価することのできる人材を育成したい。彼らが次なる50年、さらにはその先の人間社会の未来を保証する礎を築いてくれるであろう。一方で、人文系大学院の修了者の就職環境は、決して恵まれているとはいえない。現在世にある職種の多くが数十年後には無くなると言われている状況を踏まえて、我々は、彼らの能力を最大限に発揮できる場所を新たに開拓する必要がある。これが我々に課せられた急務である。これまでの人間が作り上げてきた伝統的な人文知を疎かにすることなく、新たな知の大海原へ漕ぎ出す若人を全力でバックアップする所存である。



ヤーッコーラ  
 伊勢井敏子  
 英語圏言語文化コース  
 教授

### ■学際的な音声学

コミュニケーションと言う言葉は多くの場合実際には音声コミュニケーションを指すことが多い。これは、人間生活において欠かすことができない重要な活動である。音声を扱うとなればすべて音声学の研究分野の対象となりうる。

音声学は、「人間の音声を科学的に研究する」学問分野である。言語学の下位分類の学問分野とされることが多いが、物理的、生理的性質を持つことから他の学問分野と結びつく学際的な分野である。

### ■音声学の様々な分野

音声学は調音音声学、音響音声学、聴覚音声学と大きく3つに分類される。

調音音声学ではどのように声が出るのかを説明する発声のメカニズムや構音などを扱う。一般に声の生成とも呼ばれる。音声学はもともと言語教育の中で発音の重要性から科学的手法も交え調音音声学として科学的学問分野として19世紀に確立していった。その立役者の一人がHenry Sweet (1845-1912)で *My Fair Lady* のヒギンズ教授のモデルとも言われる音声学者である。今日の国際音声記号(国際音声字母、IPA)の基を創ったDaniel Jones (1881-1967)も一説にはヒギンズ教授のモデルと言われたことがある。IPAは世界中の音声学者が集まる国際音声協会により時折、改訂が行われている。多くの辞書にはこのIPAを参照した音声記号が使われている。

なお、音声記号はたとえばプログラミングのために使われる符号ではない。調音運動に基づいた構音という物理的に証明できる実体を伴った表象としてのシンボルである。

音声環境に応じて様々に変化しうる、また、科学的に証明できる異音の集合体が音素であるが、これは抽象的なものであって、音韻論の範疇になる。音素を使うからと言って直ちに音声学分野とはならないことに注意されたい。

授業の中で発音を教える分野は教育音声学とも言われる。日本では、英語音声学という授業がだいぶ前まで必修であった。語学の教員になるには、音声の基礎を知っているべきであるから、復活させて欲しいものである。

調音音声学では、生理生体反応的な要素が強いので生理音声学もこれに入る。

他者の話す音声(発話)を人間が聞いているのかを研究するのが聴覚音声学である。一般に声の知覚とも呼ばれる。同定実験や弁別実験がよく行われる。また、心理的に快・不快、あるいは感情的にどのように感じるかを扱う分野を心理音声学と言う。

音声を物理的に分析するのが音響音声学分野である。

音声学では音響実験や生理実験による証拠を示さずに研究における主張はできない。

### ■音声学は研究の宝庫

*My Fair Lady*の中でライザの話す下町言葉(東ロンドンの市場のあたり)をコックニー方言と言う。地域方言である。物語の中で、ヒギンズ教授による発音矯正の場面がいくつかある。この作品は音声学と文学の結びつきを示す好例であると同時に、社会音声、応用音声、音響学的側面も含んでいる。

社会的な要素、例えば、男女、年齢、職業、身分等を考えた声の研究は社会音声学の範疇となる。

音声学では、一般音声学とある一つの言語の音声だけを扱う個別音声学がある。一般音声学ではすべての言語を対象とする。複数の言語音声を比較するのが対照音声学である。

世界には、音声面で未だ研究が不足する言語がある。また、ある特定の言語に限っても明らかにすべき音声現象もある。個別言語の研究から、あるいは、複数言語の比較によって普遍的な音声原理が導かれる可能性もある。現在、音声学を専攻する学生も研究者も世界的に少ないが、音声の研究は幅広く解明されるべき課題だけでも非常に多い。



和田伸一郎  
 ジャーナリズムコース  
 准教授

### ■「メディア論」

メディア論は、1960年代にマーシャル・マクルーハンによって創始されたと一般に言われている。マクルーハンは、1950年代にテレビが急速に普及する中、テレビ文化の洗礼を受けた学生と授業で出くわし、そこでショックを受けることとなった。英米中世文学の専門家だったマクルーハンは、それ以後、その蓄積をもとに、メディアを理論化することに専念した。

その後、先進諸国では高度経済成長期を迎え、豊かな社会でメディア文化も豊穰化していく。しかし、成長期、好景気の時代は戦後50年近く続いた後、終わった。この経済的な成長期があったにもかかわらず、いずれもアナログ技術に基づいた、電話はおよそ100年間、テレビは50年間それぞれ技術的にほとんど進歩しなかった(デジタル技術は、世界的な技術的優位に立つために、アメリカ軍に長い間占有されたものだったのであり、これが民生化されるには冷戦終結を待たねばならなかった)。こうした背景ゆえに、メディア論は変わらない同じ対象(メディア)を研究していればよい分野となっていた。

### ■理論の停滞

一方、人文社会学系の学問分野について言えば、フランスで、経済的豊かさを背景に、優れた思想家、理論家が多数登場した(ポスト構造主義など)。その後、彼らの仕事はアメリカや日本などで輸入されることになった。

アメリカ、日本に輸入されて行われた諸研究をいまから振り返るなら、この時期(とくに日本のバブル景気に支えられた1980年代以降しばらくの間)の学問は、そうした理論を「現実」の分析に応用するというスタイルをとるものが多く、自力で理論そのものを更新するということはあまり行われてこなかったように思われる。なお悪いのは、理論で分析できる都合の良い「現実」だけをもってきて、それを理論で分析するというものが少なくな

## 言語文化

かったことである。こうした理論主義の傾向は、とくに英米では強かった。

## ■経済の停滞と社会の不安定化

しかし、世界的な経済不況が続き、政治情勢も不安定化する中で、かつての好況時での、理論を都合のよい「現実」に適應するだけのゲームのような研究よりも、「現実」を理解し、問題解消することが切実に望まれるようになってきていることは確かである。戦後の平和の中で棚上げされてきた様々な問題、領土問題、原発問題、平和憲法、米軍基地問題等々、また新たに生じてきた世界的経済不況、社会問題等に対して。

こうして、外部から加えられる破壊的な力と、また、内部から湧き起こる不満に、日本のみならず、アメリカ、EUその他諸外国が揺さぶられている。

## ■「メディア論」の混乱と国際情勢の混乱

メディア論においても、冷戦終結後のインターネットの普及後、かつてのメディア論をなしていたような、精神分析理論や文化研究理論を当てはめるだけのゲームは通用しなくなった。

その代わりに、インターネット、スマートフォンで次々に起こるイノベーションによってもたらされたネット文化の速いスピードで起きる変容を理解することが求められている。こうした傾向の研究は、「現実」についていくだけで精一杯になっているところがある。これは、一時的に流行したサービスが廃れば、それについての研究も廃れるということが起きることを意味する。例えば最近では、ケータイメールや長電話についての若者文化研究などを挙げることができる。

この変化の速さについては、文化、社会の中だけを見ていては分からない。イノベーションは、主にアメリカのシリコンバレーからやってくるものであり、シリコンバレーを支えているのは、アメリカという超大国であり、グローバルな新自由主義経済である。

戦後の大衆消費社会で支配的だったテレビ、新聞、雑誌などのメディアは、とりわけ日本の場合、主に日本語という障壁のために、ド

メスティックなものに留まり続けた部分がある。江戸期の鎖国が文化的豊穡を生んだように、昭和のバブル期もまたこの時期特有の文化的豊穡を生んだのかもしれない。

しかし、これはイノベーションを欠いた一種の停滞を意味していたのかもしれないということは考えなければならないことであり、間違いないのは、メディア論という学問分野においては、理論が鍛え直されるために必要な緊張感が欠けていたことである。

しかしいまや、国際情勢、国家が保障する平和の下で、安定した大衆社会だけを研究しておけばいい状態にはもはやない。不安定な社会を外から揺さぶる、アメリカという国家の戦略、新自由主義経済、イノベーションを担う生産集団の力は、グローバルに広がり、日本もまた、外部からやってくるその力に揺さぶられ、社会が流動化、不安定化している。TPPの交渉に端的に表れているように、日本という国家が維持できる、社会を保護するために必要な障壁は、グローバル市場経済においては、どんどん崩れつつある。

つまり、社会はかつてのように国家に保護されておらず、グローバルな領域へと過剰に露出されている。そしてこれは規制緩和、市場の自由化、国営事業の民営化など、国家を縮小する新自由主義政策がもともと目指しているものの結果である。

ではこのことは、国家の役割が小さくなるということを示すのだろうか。そうではない。国家が放置する領域（例えば格差社会）が拡大する、あるいは、国家の闇の領域での非公式な活動、あるいは国家がもはや管理できない外部領域が増えるということの意味する。後者の例としては、タックスヘイブン（租税回避地）というインフォーマルな経済領域の世界的拡散や、戦争の民営化を担う軍事請負会社の活動を挙げることができる。

メディア、インターネットに関して言えば、最近起きた、テロ対策という大義のもとに、シリコンバレーの大手IT企業が提供するサービスを通して世界中のユーザーを監視していたアメリカの諜報機関NSAの実態についての内部告発事件は、アメリカという国家の非公式な諜報活動（オバマ政権は現時点でもなお、合法的な活動と主張している）に、世界中の

社会が過剰露出されていることを暴露した。

## ■ジャーナリズムとグローバル化

社会のこの過剰露出は、社会の活動がグローバルなインターネットに依存する分、様々な場面で問題を発生させている。

日本におけるその兆候の一つとして、日本の政治家らの不用意な発言、行動が、最近、外国の新聞ですぐさま批判されるようになったことを挙げることができる。猪瀬東京都知事によるオリンピック候補地のイスタンブール批判が米ニューヨーク・タイムズなどで報じられ、橋下大阪市長の従軍慰安婦についての発言が英BBC、米ニューヨーク・タイムズ、英ガーディアン、独シュピーゲルなどで報じられ、安倍首相が迷彩服で戦車に乗り込んだ写真が、独シュピーゲルに掲載された。

戦後50年続いてきた、保護されたドメスティックな日本の村社会で許されてきたこうした発言、行動は、いまやネットを通じて、瞬時にグローバル・スタンダードで測定されコメントされるようになってきている。

## ■大学院での教育について

このようなことは、日本の「クールジャパン」と呼ばれる文化政策についても言える。日本のアニメは、そもそもグローバルな市場で需要があるから他国に輸入されていったのであって、クリエイターや産業、国の意図によるものではなかった。しかし近年、アニメを国が経済的に支援するということになりつつある。ここで問題になるのは、日本の慣習、文化が反映されているアニメを国策で輸出するというとき、どこまでグローバル・スタンダードに沿った形でそれが行われるのかということである。アニメについての専門家の意見によれば、日本のアニメは世界一だというような過度な自尊心しかなく、それを受け入れる国々の固有の文化に配慮する意識が非常に欠けている。

現在、ジャーナリズムコース専攻所属のチュニジアからの留学生の研究テーマは、日本のアニメがアラビア語圏で放送される際に施されるローカリゼーションについてである。アラビア語圏では、日本のアニメがアメリカのディズニーアニメとともにアラビア語の吹き

替え入りで、1990年代から放送されており、子供に人気がある。

しかし、戒律に忠実なイスラム教徒にとつては、アニメ内に登場する女性の肌の露出や流血シーンなど、日本では当たり前許されている要素がことごとくNGになり、吹き替えでセリフだけでなく設定そのものが変更されたり、そうしたシーンが丸ごと削除されたり、といったことが頻繁に行われている。

このようなことが起きるのは、日本の供給側が国内市場しか想定していないためである。もし今後、国策として外国に輸出していくのであれば、当然、諸外国の文化、宗教に対する配慮が必要になってくる。

そして、このことはイスラム文化に対してだけ発生する問題ではない。それ以前に、グローバル・スタンダードに沿うことへの配慮に欠けていることが問題である。

## ■今後の課題

以上のように、日本自体が、独特なローカリティをもっていることに自覚的になる必要がある。これは、日本独自の文化と言える反面、日本の前近代性とも言えるものでもある。いわゆる「ガラパゴスケータイ」に象徴されるように、グローバル市場を狙わず、日本国内市場で売ればよいという意識が、日本独自の規格を守り通すことになり、つまりイノベーションを自ら止めたせいで、外国からのスマートフォン流入によってことごとく打ち負かされることになった。こうした既得権益を死守する前近代的な政治文化を廃することは、今後ますます求められるだろう。

当面の問題となりそうなのは、アメリカの自由主義と、ヨーロッパの保護主義の間で、日本はどのような独自の立ち位置に立つのかということである。

メディア論という学問分野に関して、国際政治情勢、グローバル経済など大局的視野、また、長期的展望からメディア、インターネットについて考えていく必要がある。こうした研究への取り組みはまだ始まったばかりである。



岡本 聡

日本語日本文化コース  
准教授

## ■心敬『ささめごと』の演習

大学院の授業で、昨年、心敬の連歌論『ささめごと』を扱い、私自身もだいぶ勉強になった。これに関しては、「心敬と『伊勢物語』注釈—「五大」思想を底流として—（『心敬十体和歌』和泉書院 2014年刊行予定）という題で論文にするつもりである。本稿は、その論文のダイジェスト版のような形で書かせていただく。

## ■「五大」思想と『伊勢物語』注釈

「五大」（火・土・風・水・空）という考え方に興味を持ったのは、芭蕉の禅の師である仏頂禅師が「四大」（火・土・風・水）循環の考え方を説いていたからである。『仏頂禅師語録』（高木蒼梧『忘岳窓漫筆』、東京文献センター、1970年）には次のようにある。

四大ト八地大、火大、水大、風大ノ四ツヲ云ナリ。（中略）四大仮合スルトキンバ天地万物各ソノ形ヲ仮作スルヲ生ト云ヒ、四大仮二散スルヲ死ト云ナリ。

この「四大」が仮に結合したものが「生」、仮に分散したものが「死」というものなのに、世の中の人々は生を愛し、死を憎むという考え方が書かれている。

『伊勢物語』の注釈や、古今伝授の中にもこの「五大」という思想を確認出来る。最も古く「五大」という言葉を確認出来るのは、宗祇あたりであろうと思われる。それ以前には、同等の思想が背景にあったものとは考えられるものの、直接「五大」という表現は用いられていない。

『伊勢物語』三十九段の内親王崇子が亡くなった場面の源至の歌「いとあはれなくぞきこゆるともしけち消る物とも我はしらすな」の注釈として宗祇の『伊勢物語山口抄』には次のように書かれている。

きゆる物とも我はしらすなとは一切衆生は法界の五大がむすぼゝれて人となれるもの也。分散すれども、法界五大の火なれば常にきゆることはなしと云心也。

ここでは、「地水火風空」という言葉が明確に使われている。それ以後は少しだけ表現を変えられながらも忠実にこの「五大」思想が受け継がれていく。

最も古い『伊勢物語』注釈（和歌知頭抄系）にはこの考え方は確認出来ず、冷泉家流という古注釈から、その死生観が一部現れてくる。旧注の早い時期に正徹がそれを「秘々」として現している。そして、正徹の弟子心敬が伝授された秘歌の内容を「本覚の都」（「五大」の「空」を現しているものと考えられる）と表現し、その後更に宗祇がこの内容をもう一步踏み込んで、この秘伝思想の中身を明らかにしている。

## 【伊勢物語正徹自署】

（正徹 蛭川智繭筆 応永三十二年成立 片桐洋一氏蔵）

秘 々  
いでいなば一  
  
秘 々  
いとあはれ一

## 【伊勢物語聞書】

（正徹から心敬 文明十一年 宮内庁著陵部蔵）

此二首何も秘哥也。色々説在之。出テいなばの哥、此哥秘也。心ハ今此人ノ死スト云ハ此世コソカギリナレ、本覚ノ都二帰ナバ年ハへヌベシ。返歌ノ心本ヨリ死スルト云事ナケレバ、死スレドモアハレナシト云也。トモシケチ八葬ノ心也。不生不滅ノ理二叶フ。

『十卷本伊勢物語注』や『増纂伊勢物語抄』など冷泉家流の古注を受け、正徹は、この二首を「秘々」とした。正徹が「秘々」とした内容が、仏教的死生観に関わる「不生不滅」の冷泉家流（『十卷本伊勢物語注』や『増纂伊勢物語抄』など）と言われる注釈書類の解釈であることは、正徹から心敬への文明十一年の伝授である宮内庁書陵部本『伊勢物語聞書』によって判明する。この『伊勢物語聞書』には、「此二首秘哥也。色々説在之。出テいなばの哥此哥秘也」として『伊勢物語正徹自署』の「秘々」という正徹の朱書きを裏付けながら、その「秘」された内容を「心ハ今此人ノ死スト云ハ此世コソカギリナレ、本覚ノ都二帰ナバ年ハへヌベシ。返歌ノ心本ヨリ死スルト云事ナケレバ、死スレドモアハレナシト云也。

## 言語文化

トモシケチ八葬ノ心也。不生不滅ノ理二叶フ」  
として指し示している。そして、この正徹から心敬へ伝えられた注釈は旧注の中で、最も早い時期に、「本覚ノ都」や、「不生不滅」を明示しているものと考えられる。ほんのわずかに早い時期に成立した一条兼良の『伊勢物語愚見抄』の「たとひなく声をきかずとも、つみにきゆまじきうへは、思の色は見ゆべしといふ心也」という注釈をここに挟み込んで考える時、明らかに正徹から心敬が受け継いだ内容が、その後、宗祇から明示されていく思想の先駆けになっている事がわかるのである。一条兼良の「つみにきゆまじき」という表現は、冷泉家流の「不生不滅」の事を言っているものとも捉えられるが、主語がわかりにくく曖昧な表現であり、正徹から心敬へ伝えられた伝授の内容とは一線を画すものと言えよう。湯浅氏が前掲「心敬と伊勢物語」で、正徹から心敬への聞書では「いとあはれ泣くぞ聞ゆる」と本来解釈される所が、「いとあはれ無くぞ聞ゆる」と解釈されている事が本聞書の独自性であると指摘している。たしかに、一条兼良の「たとひなく声をきかずとも」という解釈だと明らかに「泣く」と取っている。しかし、正徹から心敬への聞書では「死スレドモアハレナシ」「不生不滅ノ理二叶フ」とつながることから、たしかに湯浅氏の指摘するように「いとあはれ無く」と解釈するのが妥当のようである。この部分の解釈を受け継いでいるという意味では、宗砌、専順、心敬に連歌を学び、東常縁に古今伝授及び伊勢物語伝授を授けられた宗祇は極めて重要な場所に位置する。山本登朗氏『伊勢物語論 文体主題 享受』（笠間書院、2011）は京都大学蔵本『伊勢物語宗祇注』を根拠に、宗祇が常縁から古今伝授とともに伊勢物語伝授を授けられた事に言及している。

## ■宗祇の心敬句批評

宗祇の『伊勢物語山口記』にある「一切衆生は、法界の五大がむすぼゝれて人となれる物也。分散すれども法界五大の火なれば、つみに消る事はなしと云也」は、その後元禄期

の北村季吟に至るまで、一貫してこの注釈が底流をなしている。心敬の「本覚」を「法界の五大」に置き換え、「不生不滅」を「非真滅」に置き換えてはいるものの、宗祇が『伊勢物語』の注釈においても連歌の師である心敬の影響を受けた可能性は考慮しても良いものと考えられる。これを考える上で大変参考になるのが、宗祇の『老のすさみ』（日本古典文学全集）の心敬の付句に対する次の宗祇の批評である。

風も目に見ぬ山のおまびこ

物ごとになだありなしをかたちにて

風もあまびこも、あるものにはあれど、また空体なり。されば、ありなしが則ち形なり。物事にとは、この二つにて一切の空仮を悟る心なり。（中略）尤も難儀たるべきを如此付け出づること、神変のことにや。

宗祇は心敬の句についてこの『老のすさみ』の中でいくつも紹介しているのだが、とりわけこの付句に対する宗祇の解説では、「不生不滅」「五大」という事がその底流にあり、それをさりげなく付句で表現しえた心敬の句を「神変のことにや」（神のしわざではないでしょうか）などと絶賛しているのである。ここでは、「風」と「あまびこ（山彦）」があるにはあるのだけれど「空」であり、一切の物事が「空」である事を悟る心なのだと言っている。この宗祇の心敬への傾倒ぶり、あるいは「空仮」に対して示す深い理解を考慮に入れるならば、『伊勢物語』三十九段の宗祇の注釈は宗祇が冷泉家流古注に直接よったというよりは、連歌の師である心敬の影響を受けたものとするのが妥当であるものと考えられる。宗祇の弟子肖柏『伊勢物語肖聞抄』は「法界の五大なれば、死するも又空からずと云也（是亦非真滅ノ心也）」として明らかに宗祇の注釈を受け継いでいる。

## ■古今伝授と本覚思想

また、この考え方は、『古今集』の秘伝である古今伝授の中にも入り込んでいる事を指摘出来る。宮内庁書陵部蔵『古今和歌集』全十二冊の第一冊目『古今和歌集見聞愚記抄』

（『古今秘伝集』）に、その切紙とそれに関わる口伝、伝授次第などが記されている。これは、常縁から、宗祇に伝えられ、頼常、素純へと伝えられている。その内容を見ると、この「ほのぼのと」歌についても切紙で書かれている表の部分と、口伝で伝えられている裏の部分がある事が窺える。その裏の部分に、『伊勢物語』で正徹が「秘々」とした解釈で、心敬の聞書の方には書かれている「本覚の都」という言葉に近似した言葉があらわれている事が知られる。「切紙の上口伝」には次のように書かれている。

ほのぐの哥の事、生老病死の四魔と云事不可用之。嶋がくれは八嶋の外へこぎはなるゝと可心得。則此家をさるの心也。此哥ほのぐとあかしとつづけて明闇をいへる而已。又明行方へいへり。旅の部に入たる事甚深の妙也。浮世の旅、終に誰も本覚の故郷に可帰るよしにこそ

このように、古今伝授においても、人丸の「ほのぼのと」歌に対する『両度聞書』や、宮内庁書陵部蔵『古今和歌集』の切紙の表側にはとらえられない本覚思想を、裏の説を伝える「切紙の上口伝」では、「浮世の旅、終に誰も本覚の故郷に可帰るよしにこそ」としている点は着目に値する。つまり、ここでも『伊勢物語』注釈において「本覚の都」を、正徹が「秘々」としたものを、常縁もまた二重構造にして同様の表現で「本覚の故郷」を秘して伝えているからである。常縁は、和歌を正徹に学んでいるから、「本覚の都」と「本覚の故郷」の言葉が似通っているのは、秘伝の出所が同じであった可能性が考えられる。宗祇という人物は、心敬からも、常縁からも、この『伊勢物語』三十九段の解釈に本覚思想を取り込み得る事が出来た可能性を指摘出来るのである。

大学院の『ささめごと』の演習をきっかけに、『伊勢物語』伝授や、古今伝授に秘された天台本覚思想への考察に辿り着いた。その一部をここに紹介させていただいた。





# 心理学専攻



## Profile

国際人間学研究科 心理学専攻教授  
**水野りか** (MIZUNO Rika)

名古屋大学大学院教育学研究科博士課程後期課程単位取得退学。専門は認知心理学・認知科学。博士（工学）（名古屋大学）、博士（教育心理学）（名古屋大学）。近著は「認知心理学の新展開－言語と記憶」（共著）（2012、ナカニシヤ出版）。

## 1 | 認知心理学研究の現在と将来の夢

### はじめに

認知心理学 (Cognitive Psychology) は、1960年代後半に誕生した比較的新しい心理学である。認知とは、外界の対象を知覚し解釈し、理解するプロセスを指す。したがって認知心理学とは、外界から入力された情報が、脳というブラックボックスで処理され、理解、解釈、記憶、行動、思考、判断等の出力に至るまでの、人間の知的情報処理過程を明らかにすることを目的とした心理学だと言える。

1960年代は、コンピュータが飛躍的に進歩した時代でもあり、人間の情報処理過程をコンピュータが再現できるようになるのもそう遠くはないと考えられていた。特に、1950年代後半に発表されたChomsky (1956) の変形生成文法は、言語の普遍的構造が数学的に定義される可能性を示した。また、Newell & Simon (1956, 1957) による問題解決過程のシミュレーション研究の成功は、人間の思考を記号処理過程としてモデル化しコンピュータで再現できるという期待をもたらした。

ところが、人間の情報処理過程をシミュレートしようとする試みは次々と頓挫した。それは人間が、当時の人々が考えていたよりも遙かに高度な情報処理を行っているために他ならなかった。そして、人間の情報処理過程を研究する認知心理学は徐々に脚光を浴びようになり、Neisser (1967) が "Cognitive Psychology" を出版すると、様々な領域の研究者がこれを読み、人間の情報処理過程への関心が高まった。そして、1970年には同名の学術雑誌、"Cognitive Psychology" が発行され、認知心理学は1領域として確立した。また、同じ人間の情報処理過程を明らかにするとい

う目的を持つ工学、言語学、哲学、大脳生理学等の研究者は新たに認知科学という学際的学問領域を構築し協力を始めた。最近ではこれが脳科学と呼ばれることもある。

認知心理学が誕生する以前は、実験系心理学には学習心理学、知覚心理学、記憶心理学等、様々な領域があった。しかし、いずれも人間の情報処理過程を扱う点では同じであることから、脳内での情報処理を扱うこれらの心理学は、認知心理学という枠組みでくくられるようになった。また、子どもの言語発達などの情報処理過程を扱っている研究者は、発達心理学者であると同時に認知心理学者でもあるし、自閉症児の認知機能や情報処理過程の特徴を扱っている臨床心理学者は認知心理学者でもある。そのため、認知心理学会では実験系から臨床系に至るまでの様々な領域の研究者が発表を行っている。

### 心理学専攻での認知心理学研究の現在

現在、心理学専攻の認知心理学を専門とする教員は筆者(水野)と松井孝雄教授の2名で、院生は1名である。ここでは我々や院生が行ってきている認知心理学研究を紹介する。

#### 母語による文字・単語処理過程の相違

認知心理学では、よく文字や単語等の言語刺激を用いて言語処理、学習、記憶過程を解明する実験を行う。大半の実験は欧米で行われ、数多くの知見が得られてきた。しかし我々は、日本語母語者の文字や単語の処理過程自体が英語母語者と異なるため、結果ひいては知見が違ってきてしまうことを見出した。ここではその研究を簡単に紹介する。

アルファベットやひらがな、カタカナは、

表音文字と呼ばれる。表音文字は、形態コードと音韻コードという2種類の符号から成り、各コードの処理過程は文字マッチング実験という手法で検討されてきた。文字マッチング実験とは2つの文字を、Figure 1に示すような3条件で一定の時間間隔をおいて呈示し、それらの異同判断時間を測定するものである。第1文字は、第1文字の処理が完了するのに十分な500ms呈示されるため、第2文字が呈示された時の形態的一致と音韻的一致の判断時間はそれぞれ、第2文字の形態コードと音韻コードの処理時間を反映することになる。Posner, Boies, Eichelman, & Taylor (1969) は、呈示間隔を独立変数とした文字マッチング実験を実施し、形態コードの処理速度と音韻コードの処理速度を明らかにするとともに、時間の経過とともに音韻コードだけが利用されるようになることを見出し、これが定説となっていた。しかし、我々と中部大学の提携校であるOhio UniversityのBellezza教授と院生の共同研究では、そうした傾向は英語母語者で認められるだけで、日本語母語者の形態コードの処理速度は英語母語者より迅速で、かつ、日本語母語者の音韻コードの利用度は低く、主に、そして継続的に、形態コードを利用する傾向にあることが明らかとなったのである(水野・松井・Bellezza, 2007; Mizuno, Matsui, Harman, & Bellezza, 2008)。

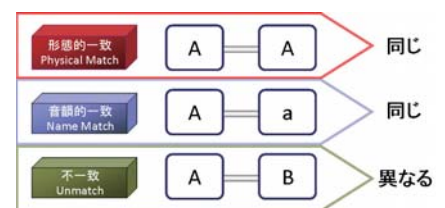


Figure 1. 文字マッチング実験の3条件と異同判断

## 心理学

その後の研究で、形態コードへの依存度が高いという日本語母語者の傾向が、単語でも見出された。単語の作業記憶容量（メモリスパン）を調べた欧米の研究では、音韻数が多い単語ほど読みの速度が遅くメモリスパンが少なく、読みの速度の速い参加者ほどメモリスパンが大きいという比例関係が認められ、約2秒で読める単語数とメモリスパンが一致することが見出されていた (Baddeley, Thomson, & Buchanan, 1975)。しかし水野・松井 (印刷中) は、この著名な実験結果はあくまでも英語母語者のもので、日本語母語者の場合は単語の音韻数よりもむしろ文字数の影響が大きいのではないかと考えた。実際、Baddeleyら (1975) で用いられた音韻数の多い単語は、文字数も多かったのである (e.g. "Zinc" vs. "Aluminium")。そこで、モーラ数 (日本語の音韻的長さを表す単位) は異なるが文字数が等しい単語 (e.g., 「初歩」 vs. 「昔話」) を刺激として日本語母語者のメモリスパンを測定したところ、読みの速度とモーラ数に比例関係はあるものの、読みの速度が速い参加者ほどメモリスパンが大きいという関係は認められなかった。また、文字数は異なるがモーラ数が等しい単語 (e.g., 「菓」 vs. 「八百屋」) を刺激としてメモリスパンを測定すると、読みの速度が同じでも文字数が多いほどメモリスパンが小さかった。つまり、日本語母語者の単語のメモリスパンには単語の音韻的な長さよりも形態的な長さの方が大きく影響することがわかったのである。

日本語母語者は極めて多くの同音異義語を利用する。その多さは他の言語に類を見ない。例えば、公正、向性、厚生、好晴、更生、更正、構成、攻勢、坑井、後世、恒星、恒性、行星、校正、後生、苟生、高声、控制、甦生、硬性、荒政、興盛、蕘逝、鴻声、曠世、孔聖、広西、江西、江青は皆同じ [kousei] という発音を有するが、日本語母語者は苦もなく処理することができる。こうした言語で音韻コードに依存したのでは特定の語彙表象に到達することは難しいはずで、形態コードへの依存度が高くなるのは当然であろう。この事実を無視して欧米で行われた研究の追試を行えば、全く

異なる結果が得られ、解釈を誤る可能性もある。

日本語母語者の文字・単語処理特性を明らかにすることは、そうした誤った解釈の防止と確かな心理学的知見の獲得にとどまらず、人工知能工学等の他領域での、種々の母語者の特性を反映した自然言語処理の包括的モデルの構築にもつながることが期待されている。

## 側方空間制限による重心動揺への心理的影響の検討

現在在籍している認知心理学系の院生の古田国大氏は、春日井市のあさひ病院のリハビリテーション科に勤務する社会人で、主指導は松井教授、副指導は筆者と発達心理学が専門で子どもの他者理解能力、「心の理論」を研究している佐藤友美助教である。古田氏は、歩行リハビリテーションでの介入の際 (Figure 2)、側方に壁がある場合とない場合の重心移動が異なることを見出し、心理的な要因がその重心移動に影響する可能性を実験的に検討し、修士論文をまとめる予定である。

物理的な側方の空間制限と、心理的な影響要因の特定とその作用の過程やメカニズムが明らかになれば、この知見をもとに、より効果的なリハビリテーション介入が可能になることが期待できる。

## 将来の夢

上述の通り、心理学専攻の認知心理学系領域では最新の研究が行われており、他の領域や医療実践への貢献も期待されている。また、Ohio Universityを始め多くの欧米の大学では認知心理学研究が極めて盛んで、その知見は各種の企業にも提供されている。しかし日本では心理学は人文系であり、院生の企業への就職の門戸は学部生よりも広くないのが現状で、これが進学者増加の妨げとなっている。しかし社会人である古田氏が得た研究成果が実践の場に直結した有用なものであることは、この領域の知見が社会的貢献にもつながりうることの証拠だとも言えよう。

今後は、認知心理学系領域でどのような研究が行われており、また、行われうるのか、



Figure 2. 古田氏による歩行リハビリテーションでの介入の様子

その知見が社会的にいかにかに貢献しうるかについて、広く理解が得られるよう努力をしたい。これが理解されるようになれば、人文系の院生の社会進出がより円滑になり、これがひいては、より多くの院生の心理学専攻の入学、実りあるより多くの研究の遂行につながるはずである。近い将来これが実現すること、それが我々の夢である。

## 引用文献

- Baddeley, A. D., Thomson, N., & Buchanan, M. (1975). Word length and the structure of short-term memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, *14*, 575-589.
- Chomsky, N. (1956). Three models for the description of language. *IRE Transactions on Information Theory*, *2*, 113-124.
- 水野りか・松井孝雄 (印刷中). 日本語母語者における漢字表記語のメモリスパンに対する形態情報と音韻情報の影響. *認知心理学研究*.
- 水野りか・松井孝雄・Francis S. Bellezza (2007). 表音文字処理における形態・音韻コードへの依存度の日本語母語者と英語母語者の相違. *認知心理学研究*, *5*, 1-10.
- Mizuno, R., Matsui, T., Harman, J. L., & Bellezza, F. S. (2008). Encoding times of phonograms by English and Japanese readers: Eliminating the time for attention switching. *認知心理学研究*, *5*, 93-105.
- Neisser, U. (1967). *Cognitive psychology*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- Newell, A., & Simon, H. A. (1956). The logic theory machine—A complex information processing system. *IRE Transactions on Information Theory*, *2*, 61-79.
- Newell, A., Shaw, J.C., & Simon, H.A. (1959). Report on a general problem-solving program. *Proceedings of the International Conference on Information Processing*, 256-264.
- Posner, M. I., Boies, S. J., Eichelman, W. H., & Taylor, R. L. (1969). Retention of visual and name codes of single letters. *Journal of Experimental Psychology. Monograph*, *79*, 1-16.

## Profile

国際人間学研究所 心理学専攻准教授  
高比良美詠子 (TAKAHIRA Mieko)

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程単位取得退学。専門は社会心理学。博士（人文科学）（お茶の水女子大学）。近著は『社会心理学』（共著）（印刷中、放送大学教育振興会）。

## 2 | 社会心理学研究の現在と将来の夢

## はじめに

心理学は、科学的な方法を用いて人間のこころの働きをモデル化することを目指す「人間科学」の1つに位置付けることができる。つまり、物理学や生物学など、科学に分類される他の研究分野と同様に、体系的で普遍的な「理論」を発見することが心理学の大きな目標になっている。ただし、研究の対象が、「モノ」ではなく「人間」である点に、心理学という学問の面白さと難しさが存在する。

なお、現在の心理学は、研究的な関心によって領域が細分化されており、本学の心理学専攻でも、認知心理学、知覚心理学、臨床心理学、教育心理学、発達心理学、健康心理学、社会心理学など、さまざまな領域の心理学を学ぶことができる。本稿では、筆者（高比良）の専門領域である「社会心理学（Social Psychology）」について詳しく取り上げる。

「社会心理学とはどのような学問か？」という問いに対しては、“個人の思想、感情、行動が、現実の、想像上の、あるいは暗黙裡の他者の存在によってどのように影響されるかを理解し、説明する学問である”というAllport（1954）の定義が答えとしてよく引用される。また、社会心理学の父と呼ばれるLewin（1951）によって提案された、「個人の行動は、個人と環境の相互作用によって決まる」という考え方も、社会心理学の基本方針を理解する上で核となる。

まとめると、社会心理学とは、個人の特性に加え、周囲の環境が個人の行動に及ぼす影響を考慮に入れながら、人間行動の法則性を探求する学問であり、環境の中でも特に、「社会環境（対人環境）」の影響に注目している点に特徴があると言える。

もちろん、個人の行動に影響を与える環境は必ずしも社会環境に限定されるものではな

く、自然環境のあり方が私たちの行動を規定することも多い。しかし、私たちを取り囲む社会環境は、個人の心や行動に対して特に大きな影響力を持つと考えられている。例えば、1人で答えるときには難なく正解できる問題であっても、周囲の人がそろって間違った答えをすると、それに合わせて自分も間違った答えを言うってしまう「同調」という現象がよくみられる（Asch, 1955）。このような結果からも、他者の存在が私たちの行動のあり方を大きく規定している様子が伺える。

人は、他の同種の個体と協力して大規模な群れ（社会）を形成し、その中で暮らす「社会的動物」である。社会の中で生きることは人にとって本質的な問題であり、社会を構成している同種の個体（他者）のことを常に意識せざるを得ない。そのため、社会環境の中で私たちがどのように感じ、どのように考え、どのように行動するのかを理論化することは、重要な課題だと言える。

心理学専攻での  
社会心理学研究の現在

社会心理学は、「社会的動物としての人間のふるまい」に注目しているため、社会の中で生じる行動は、すべて社会心理学の研究範囲に含まれる。そのため、社会心理学の研究テーマは必然的に多様なものになりうるが、大きく分ければ、「個人内過程」に関する研究と、「個人間過程」に関する研究に大別できる。前者は、私たちが自分を取りまく社会環境をどのように理解しているかという個人の認識の問題を扱っており、後者は、私たちが自分を取りまく社会環境からどのような影響を受けているかという影響過程の問題を扱っている（Taylor, 1998）。そこで以下では、筆者（高比良）がこれまでにやってき

た研究を交えながら、個人内過程に関する研究と、個人間過程に関する研究の実例を紹介する。

## (1) 個人内過程の研究例：透明性の錯覚

個人内過程の場合、「私たちは、社会的刺激（他者、自分、社会など）をどのような形で認識しているのか」という問題が主に扱われている。対人認知や社会的推論、自己認知などに関連する研究が代表例として含まれるが、本稿では、他者に対する推論と現実とのずれに注目した研究を取り上げる。

私たちは、自分以外の人間が考えていることや感じていることを直接的に知ることはできない。しかし、対人コミュニケーションを円滑に運ぶためには、情報の送り手の気持ちを、情報の受け手ができるだけ正確に推測することが重要になってくる。例えば、送り手がまじめな気持ちで話したことを、受け手が冗談として受け取った場合、送り手は気分を害するだろう。そのため、情報の受け手は、コミュニケーションを行っている間、情報の送り手が発する言語的・非言語的情報に気を配り、送り手の気持ちをリアルタイムで推測している。そして、情報の送り手も、受け手が送り手の気持ちを正確に受け取ってくれていると期待している。

しかし、受け手が行う推測は、多くの場合、送り手が期待しているほど正確ではないことが実証研究によって明らかになっている。例えば、Kruger, Epley, Parker, & Ng (2005) は、実験参加者を2人1組にして、送り手役の参加者の気持ちを、受け手役の参加者に推測させる研究を行っている。そして、受け手の正確性についての送り手の期待と、受け手が実際に示した正確性（受け手の正答率）の程度を比較した。その結果、送り手が期待していたほど、送り手の気持ちは受け手に伝わっていない（つまり、送り手は、自分の気持ちが、

## 心理学

受け手に伝わっていると実際以上に思い込んでいる)ことが明らかになった。この現象は、「透明性の錯覚」と呼ばれている (Gilovich, Savitsky, & Medvec, 1998)。

また、このような透明性の錯覚は受け手の側にも存在しており、送り手の思考や感情を実際以上に受取れていると、受け手の側も思い込んでいる (武田・沼崎, 2007)。これらの結果から、情報の送り手も受け手も、実際以上に、「自分は理解されている」「自分は理解している」と期待しあいながら、コミュニケーションを行っている様子が見えてくる。

なお、このような認識上のバイアス (歪み) がコミュニケーション場面において存在していることが明らかにされた後も、なぜそのようなバイアスが生じるのかという原因の探索や、このようなバイアスが強く生じる条件の検討が精力的に行われている。筆者 (高比良) も、その一環として、インターネットを使った感情伝達時に生じる透明性の錯覚について検討している (高比良・伊藤, 2013)。

## (2) 個人間過程の研究例：相談行動

次に、個人間過程の研究では、「私たちは社会の中で他者とどのように関わっているのか」という問題が主に扱われており、他者への依頼や要請、他者に対する援助や攻撃、親密な関係の形成と崩壊など、対人間で生じる相互作用に着目した研究が数多く行われている。また、集団内での行動や、複数の集団間で生じる協力や対立に焦点を当てた集団過程の研究も行われている。本稿では、さまざまな対人相互作用の中でも、「他者に相談する」という行為が人に及ぼす影響に注目した研究を取り上げる。

私たちはつらい経験をしたとき、問題の改善に向けて努力したり、その経験によって生じた不快感情を取り除こうと試みる。その過程でよく行われるのが、「相談行動」である。そして、このような相談行動が、相談者の心身の健康状態に及ぼす影響については、自己開示、コーピング、ソーシャルサポートなどの分野でこれまで研究が行われてきた (e.g., Frattaroli, 2006)。

例えば、自己開示やコーピングに関する研究では、悩み相談場面において「相談者」が示す行動と、「相談者」の心身の健康状態の関係が検討されてきた。一方、ソーシャルサポートの研究では、自分が悩みを相談した時に、相談相手はこのように反応した (あるいは反応するだろう) という「相談者」の解釈や期待が測定され、それが「相談者」の心身の健康状態に及ぼす影響が検討されてきた。つまり、これまでに行われてきた研究では、相談行動の効果を最大限に引き出すために、「相談者 (サポートを受ける人)」はどのようにふるまうべきかという問題が、相談者の視点からのみ検討されてきたといえる。

しかし、日常場面で生じる相談行動は双方向的なコミュニケーションであり、相談者と同じく相談相手も生身の人間としてその場に存在している。そのため、相談という行為が、相談者だけではなく、「相談相手 (サポートを提供する人)」に与える影響についても同時に考慮に入れながら、よりよい相談のあり方を探っていくことが重要だろう。そこで筆者 (高比良) は、相談を受けることによって、相談相手に生じる感情および反応のバリエーションと、相談相手が対応困難と感じる相談の内容などを検討する研究を現在進めている (Takahira, 2012)。

## 将来の夢

ここまで、社会心理学が目指している方向性と、実際に行われている研究内容について紹介してきた。最後に、社会心理学の特徴を踏まえながら、本学の心理学専攻におけるこれからの夢について考えてみたい。

唐沢 (2012) は、社会心理学が提供する「知」の意義を、①人はどういう存在かという「人間観」の提供と、②社会の中で役立つ「実践知」の提供という2つに整理している。

社会心理学は、研究で得た知を実際の社会問題の解決に役立てようとする②のような方向性を元々強く持っている。そのため、社会心理学が提供する「知」は、私たちの知的好奇心を満足させるとともに、社会の中で生じ

ている問題の実践的な解決のヒントになる可能性を持っている。その意味で、社会心理学が提供する「実践知」は、学生時代より、むしろ、社会に出てから力を発揮すると言える。

また、科学的思考は、経験 (データ) を通して証明できる情報 (科学理論) を信頼するという原則を基本としているが、社会心理学は、このような科学的な方法論を積極的に採用してきた。そして、さまざまな努力と工夫を重ねながら、「社会の中で生きる人間のこころ」に関するデータを収集・分析してきた。そのため、社会において現実に生じている問題を数値や言葉に置き換え、論理的に分析していくことを得意としている。

そこで今後は、教育、医療、福祉、製造、販売、サービス、営業、企画、事務など、さまざまな業務に従事する社会人が、自分が感じている現場の問題を、科学的な手法により自ら問い直すことを助ける場所に、本専攻がなっていくことを夢見つつ、本稿を終わりたい。

### 引用文献

- Allport, G. W. (1954). The historical background of modern social psychology. In Lindzey, G. (Ed.) *Handbook of social psychology*, Vol.1. Cambridge, Mass: Addison-Wesley. Pp. 3-56.
- Asch, S. E. (1955). Opinions and social pressure. *Scientific American*, **193**, 31-35.
- Frattaroli, J. (2006). Experimental disclosure and its moderators: A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, **132**, 823-865.
- Gilovich, T., Savitsky, K., & Medvec, V. H. (1998). The illusion of transparency: Biased assessments of others' ability to read one's emotional states. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 332-346.
- 唐沢かおり (2012). 「成功」した学問としての社会心理学 唐沢かおり・戸田山和久 (編) 心と社会を科学する 東京大学出版会 Pp.13-40.
- Kruger, J., Epley, N., Parker, J., & Ng, Z-W. (2005). Egocentrism over e-mail: Can we communicate as well as we think? *Journal of Personality and Social Psychology*, **89**, 925-936.
- Lewin, K. (1951). *Field theory in social science*. New York: Harper.
- Takahira, M. (2012). How do people feel and react when friends consult them? :Responses of non-professionals during consultations in daily life. *Journal of Educational Sciences & Psychology*, **2**, 84-95.
- 高比良美詠子・伊藤真貴 (2013). 感情伝達時の顔文字使用が透明性の錯覚に及ぼす影響. 日本社会心理学会第54回大会発表論文集, 299.
- 武田美亜・沼崎 誠 (2007). 相手との親密さが内的経験の積極的伝達場面における2種類の透明性の錯覚に及ぼす効果. *社会心理学研究*, **23**, 57-70.
- Taylor, S. E. (1998). The social being in social psychology. In D. Gilbert, S. T. Fiske, & G. Lindzey (Eds.), *The handbook of social psychology*, Vol. 1. 4th ed. London, McGraw-Hill. Pp.58-95.

## Profile

国際人間学研究科 心理学専攻教授  
願興寺礼子 (GANKOJI Reiko)

名古屋大学大学院教育学研究科修士課程修了。専門は臨床心理学。近著は「心理検査の実施の初歩」(共著)(2011、ナカニシヤ出版)。

## 3 | 臨床心理学の過去・現在・将来の夢

## はじめに

「臨床心理学 (Clinical Psychology)」は、何らかの理由で心身に適応困難をきたし、悩み苦しんでいる個人を対象にし、活用しうる限りの最善の知識や技術を駆使して、目の前にいる人を理解し、その人がその人らしく幸せに生きるために最大限の援助を行うことが目的となる学問である。困っている人を援助するという現実的な要請から出発しており、実践と深く関わっている学問である。

悩み苦しむ人達に対する臨床心理学的アプローチは、人類の歴史が始まった原始時代からなされてきたが、学問としての臨床心理学の歴史は、1896年、アメリカの心理学者Witmerがペンシルバニア大学に世界最初の臨床心理学の実践の場である心理クリニックを創設したことによって始まる。1940年代後半、アメリカでは、第二次世界大戦において、人物の選抜を多数に対して短時間で進行必要性や戦後の軍人の社会復帰に伴う心理的問題に対処するために、臨床心理学が大いに利用され、学問領域としても飛躍的に発展した。

日本の臨床心理学は、第二次世界大戦後にアメリカの臨床心理学を移入することにより成立した。その後、1982年に「日本心理臨床学会」の設立を受けて急速に発展を遂げ、現在では日本の心理学関係の諸学会の中で最大規模の会員数を誇る学会にまで成長した。さらに1990年に文部省(現文部科学省)によって許可された財団法人日本臨床心理士資格認定協会による臨床心理士資格制度の導入により、臨床心理学ブームが興り、臨床心理士は高校生のおこがれの職業になった。しかし、臨床心理士資格は未だ国家資格ではなく、一民間資格にすぎず、そのため、病院、各種の相談所、学校など、職場ごとに役割や身分、待遇がまちまちで、どの職場においても総じ

て身的にも経済的にも不安定な状況におかれているというのが実情である。臨床心理士の国家資格化は、我々臨床心理学に携わる者の悲願である。最近になって、国家資格創設の動きが改めて活発化しており、それほど遠くない将来、実現の見込みである。今日、不登校、いじめ、うつ病、自殺の問題など、社会にうまく適応できず悩み苦しむ人々は増加の一途をたどっている。臨床心理学に対する社会の期待や関心の高さは、こうした切実な社会的要請を反映したものであり、臨床心理学が担う役割は、日増しに大きくなってきていると言える。

心理学専攻での  
臨床心理学のこれまで —過去—

平成16年度に国際人間学研究科に心理学専攻が創設されて、初めての入学生が臨床心理学系の院生、中川真理子氏であった。中川氏は、当時、三重県内のハローワークで産業カウンセラーとして勤務する社会人で、指導を武藤久枝教授(現、現代教育学部教授)、副指導を松浦均准教授(当時。現在は三重大学へ転出)と筆者(当時は准教授)が担当した。中川氏は、当時文部科学省が推進していた中学校へのキャリア教育導入にあたって、キャリア教育を受ける中学生側に必要な要因を解明するために、中学生側の準備状況を測定するための心理尺度、14項目3因子から構成される「中学生用キャリア教育レディネス尺度」を作成した(中川、2006)。ハローワークにおいて就労困難な若者に接している中で日々大きくなっていった問題意識から生まれた研究テーマであり、社会人の貴重な視点から切り込んだ非常に独自性の高い内容の修士論文を完成させた。中川氏は、大学院を卒業後、日本産業カウンセラー協会により、

シニア産業カウンセラーに認定され、現在は、三重県労働福祉協会「若者就業サポートステーション・みえ」の総括コーディネーターとして、若者の就労支援に当たる傍ら、中学校や高校に出向いてキャリア教育を行うなど修士研究の成果を活かして活躍中である。ここ数年、筆者が学部で担当している「臨床心理学F」の授業の中でも、特別講師として就労支援の現場から見えてくる現代の若者気質、支援のポイントについて話をしてもらっている。特に、就活に取り組み始めたばかりの3年生の受講生には、とても興味深い話で、好評を博している。

## 臨床心理学的地域援助 —現在—

現在、心理学専攻の臨床心理学を専門とする教員は吉住隆弘准教授と筆者の2名である。ここでは、筆者が行っている臨床心理学的地域援助—公立中学校の適応指導教室で行っている学習支援活動—について紹介する。臨床心理学的地域援助とは、他領域の専門機関と連携しながら、個人だけでなく地域、学校、職場などの環境に働きかけ、情報の整理や提供、環境の調整などを行う、臨床心理士の専門性を活かした重要な専門的行為である。GLOCAL Vol.3で吉住准教授が、「学習教室きみいろ」を立ち上げ、経済的困難世帯の子どもを対象とした中部大学生による学習支援について紹介されていたが(吉住、2013)、吉住准教授のこうした取り組みも臨床心理学的地域援助と言える。

適応指導教室に在籍する  
不登校生徒に対する学習支援活動

児童生徒が、何らかの心理的、身体的、あるいは社会的要因により、登校できない状態、いわゆる不登校問題が取り沙汰されるようになってから久しい。文部科学省の調査による

## 心理学

と、年間30日以上欠席する不登校児童生徒の数は、平成7年度から9年度にかけて急激な増加が見られたが、ここ数年は若干の増減が見られるもののほぼ横ばいの状態で推移し、平成23年度では、約13万人の不登校児童生徒が出現している。児童生徒の2.8%、38人に1人の不登校児童生徒がいるという計算になる。依然として高い出現率を示している不登校への対策として、市町村の教育委員会は、不登校の小中学生のために、学籍のある学校とは別の施設の中に、学習支援を行いながら本籍校への復帰を目指す、「適応指導教室」を設置している。

筆者らがやっている学習支援活動は、春日井市の教育委員会を介して春日井市立東部中学校より筆者のもとに協力依頼があったことに始まる。早速ゼミ生に話をもちかけたところ積極的な参加の意向が確認され、2011年12月より筆者のゼミ生によるボランティア活動が開始された。東部中学校の適応指導教室は通常の適応指導教室と違い校内に併設されている。そのため東部中学校の教師による直接指導が可能、自由に原籍学級へ戻って授業に参加できるという特徴がある。これらの特徴には長短があるが、長所を最大限に活かすべく、ボランティアスタッフ（以下スタッフ）が活用されることになった。スタッフの主たる活動は、適応指導教室に在籍する不登校傾向の生徒達に学習支援を行うことであったが、スタッフには教師や親という垂直の関係でも、生徒同士のような水平の関係でもない、斜めの関係、いわば生徒にとっては少し年上の同一化の対象となり得る兄や姉的な存在になってほしいと伝えた。さらには、生徒ひとりひとりが安心できる居心地のよい空間づくりにも心を配るように指導を行った。なお、筆者は、中学校との連絡、調整、スタッフを支えたり助言指導を行うスーパーバイザーとしての役割を担った。

活動当初は、在籍者が5名。同じ教室に居ながら個々人が壁で閉ざされた別々の空間の中にいるような全くコミュニケーションがとれていない、活気のない状態であった。スタッフがその中に加わっていくと、比較的早い段

階で、生徒とスタッフの間でコミュニケーションが成立。そこでの二者関係が安定してくるにつれて、スタッフに見守られていると、生徒達は、スタッフを自分の弱い自我を補強する“補助自我”として活用し始め、自分の空間から出て他の生徒や先生と自発的に交流を始めるようになっていった。コミュニケーションが活性化されるにつれ、しだいに適応指導教室は凝集性の高い居心地の良い仲間集団へと再編成されていくことになった。そうした適応指導教室内の変容は、生徒ひとりひとりにも変化をもたらし、生徒達は様々なことに対して小さなチャレンジ（たとえば1時間だけ好きな授業を原籍学級で受けてくる、午前中で帰宅していた生徒が給食を食べてから帰宅するなど）を始めるようになる。いくつものチャレンジの中で、成功体験を重ねた生徒達には自信が芽生え始め、学習にも以前より意欲的に取り組むようになった。さらには、中3の生徒が受験を決意して、スタッフと意欲的に勉強し始めると、それを見ていた2年生以下の生徒達は、高校進学を半ば諦めていた者も「自分も高校へ行きたい。行けるかも」と受験に対して前向きな発言をするようになる。生徒ひとりひとりがそれぞれのペースで、皆、確実に成長し、それがまた相互にポジティブな影響を与え合うという、円環的連鎖が適応指導教室内に構築されていくことになった。

一方、活動に参加しているスタッフの学生達の方も、どのように接したら生徒達が心を開いてくれるのかと、悩み苦しみながら、試行錯誤を繰り返す中で、自然に発達促進的な態度を身につけ、最近では、生徒達の内的な発達を見守りながら彼らのペースで学習支援を行えるようになってきている。生徒から厚い信頼を寄せられ、「〇〇さんが来てくれる日は絶対学校へ行く」とまで言われるスタッフもいるほどである。スタッフ側も活動を通して日々成長していることを実感させられる。

中学校の先生方にも、「あの生徒がここまで頑張れるようになるとは思っていなかった」と、生徒達の成長を感じ取っていただけており、今では、この活動を長期に渡って継

続してほしいと要望されるまでになってきている。また、スタッフの負担軽減をはかるため、我々の活動を春日井市の「創意と活力ある学校づくり推進事業」に申請し、今年度はそれが採択され、スタッフの交通費の一部を事業の予算から負担していただけるようになった。さらには、この活動がきっかけで、筆者の研究やゼミ生の卒業研究にも、生徒や保護者、先生方に協力いただけるようになり、良好な互恵関係が出来上がってきている。

## 将来の夢

本格的に臨床心理学を志す者は、臨床心理士資格を取得できる指定大学院に進学していく場合がほとんどである。心理学専攻は指定大学院ではないため、この点ではやや分が悪く、臨床心理学を志す院生の増加にはなかなかつながらにくい。しかし、臨床心理士資格がなくても、上述した中川氏のように、心理学専攻で行った修士研究を活かし、高い専門性をもって、社会で活躍することは十分に可能である。筆者は、心理学専攻を卒業後、社会で得た知識や経験を中川氏のように、特別講師や非常勤講師として、学部学生に還元してもらいたいと考えている。身近な大学院の先輩の活躍する姿に触れることは、学生にとって大きなインパクトがあり、前向きに人生を考える絶好のきっかけになる。本心理学専攻で、是非、中川氏のような人材を育成したいと思う。

吉住准教授や筆者がやっている臨床心理学的地域援助は、これまでに一定の成果、評価が得られている。今後も地道な活動を続けられ、社会からさらに高い信頼を得ることはそれほど難しいことではないだろう。現場で役に立つ「知」を開発するために、自らの実践活動を対象化し、評価していく努力も併せて行っていきたいと思う。

## 引用文献

- 中川真理子（2006）.「中学生用キャリア教育レディネス尺度」作成の試み 中部大学大学院国際人間学研究所心理学専攻修士論文（未公開）.  
吉住隆弘（2013）. 経済的困難世帯の子どもを対象とした学習支援への取り組み 中部大学大学院国際人間学研究所レポートGLOCAL.3.15-16



Profile

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻准教授

篠宮 雄二 (SHINOMIYA Yuji)

1995年名古屋大学大学院文学研究科史学地理学専攻博士後期課程満期退学。修士（文学）。名古屋大学大学院文学研究科講師を経て現在に至る。専門は日本近世史で、職人を対象に経営の特質や職人集団を介しての地域や国家との関係性を分析。近年は河川漁業など小規模な生業にも関心を広げている。著書として『新しい近世史』（第3巻、第4巻、共著）、『身分的周縁と近世社会』（第2巻、共著）などがある。



## 歴史学・地理学専攻の特色とこれから 6年間の教育・研究活動を振り返って



### はじめに

歴史学・地理学専攻は2008年に前期課程がスタートし、2010年には後期課程が設置された大学院国際人間学研究科のなかでは最も新しい専攻です。中部大学設立50周年という節目にあたり、いわば新顔の歴史学・地理学専攻の特色を皆さんに紹介し、あわせて開設から6年間の活動を踏まえて、この専攻が進むべき将来の方向性を語ってみようというのが今回の企画です。

以下では、まず私からこの専攻の特色とこれまでの教育・研究活動を紹介した上で、専攻全体としての今後進むべき方向性について私なりの「夢」を語ってみたいと思います。さらに、地理学担当の山元貴継先生、歴史学担当の水野智之先生からそれぞれの研究・教育の紹介とこれからの「夢」を語っていただき、歴史学・地理学専攻の今後の可能性を探ってみてみたいと思います。

### 歴史学・地理学専攻の特色

私たちの専攻の教育目標は、歴史学と地理学というそれぞれの学問領域における方法論や研究成果を踏まえたうえで、時間的意識と空間的意識を統合した知識と教養を習得し、高度な知識情報社会に対応できる研究者や高度専門職業人を育成することにあります。

この教育目標を達成するために前期課程で

は、入学する学生が「歴史学コース」「地理学コース」のいずれかを選択し、まずは主たる専攻としての歴史学（あるいは地理学）についての高度な知識と専門的な研究方法を重点的に習得することになっています。その上でいわば副専攻として地理学（ないしは歴史学）についても特論などの授業を通じて、高度な知識とともにその分野に固有な分析視角や方法論を学び、時間・空間の両次元からグローバル化とローカル化が同時進行する現代社会を的確に把握・認識できる人材の養成を目指しています。

「歴史学コース」は、グローバル化する現代社会のなかで、世界における日本の位置づけを重視しています。日本の古代から現代まで各時代をカバーするとともに、ヨーロッパ史、アジア史などの地域史、思想史・科学史・文化史などの分野史を配して、日本を軸とした広義の歴史的研究に重点を置いています。

一方、「地理学コース」は、人間と地域とのかかわりに着目し、これらを人文・社会科学の手法を用いて解明し、地域が抱える諸問題の解決を目指す視点を重視しています。経済・産業・歴史・都市地理学といった人文地理学分野に加え、地理情報、都市政策、地域政策などの応用科目を配し、人文・社会現象を研究対象とする人文地理学研究に重点を置いています。

さらに後期課程では、より専門的な研究能

力の向上や社会人としての体験的知識・教養を学術的に体系化するため、教員の専門に即した日本近世地域史・日本近代外交史・日本思想史・比較経済史・現代政治史・東アジア思想史・科学技術史をテーマとする歴史学専門研究演習、歴史地域論・日本地域産業史・都市地域構造論・都市地域再生論・空間分析論をテーマとする地理学専門研究演習といったカリキュラムを用意し、学生の専門に対応した研究指導を行っています。

このような教育カリキュラムに対応するため歴史学分野9名、地理学分野5名の計14名の専任教員に加え、他専攻の教員の協力を得ながら多彩なテーマを掲げた授業を開講しています。院生たちは指導教員のアドバイスを受けながら、自分の研究テーマや問題関心にしたがって授業を選択し、少人数クラスのもと先に掲げた教育目標に向けて勉学と研究に取り組んでいます。

### 歴史学・地理学専攻の6年間

冒頭で述べたように歴史学・地理学専攻がスタートして6年が経ちました。この間、前期課程では歴史学コース7名、地理学コース3名の修了者を出しており、内1名が後期課程に進学しています。そして現在、前期課程には6名の院生が在籍しています。

院生の多くは歴史学・地理学専攻が基礎をおく中部大学人文学部歴史地理学科を卒業し

## 歴史学・地理学



資料調査の様子

て進学してきた人たちですが、教員・会社員などの経験を経て入学した社会人も含まれています。

26号館1階には院生の学習・研究の場として院生室があります。この院生室は他専攻の院生との共同スペースであり、現時点では院生一人に一つの机が割り当てられ、研究に専念できる環境が用意されています。院生室は異なる専門分野の院生や社会人経験者などとの交流を通じて、学問的にも人格的にも互いに刺激をうける場にもなっています。

これまでに提出された修士論文は、近世初期の名物茶器を考察した研究や近世の思想家佐藤一斎に関する思想史的研究、尾張藩領内における鉄砲取締政策や瀬戸焼と美濃焼の地域的流通の比較検討といった尾張・美濃地域を対象とした研究、ルネサンス期の商人文化や魔女裁判をテーマとする西洋史研究、廃川跡地の土地利用に関する地理学的考察など、多彩な内容となっています。

一方、各教員の研究活動を市民の皆さんに還元する活動も行ってきました。たとえば国際人間学研究科主催のシンポジウム「地域をむすぶ産業・生活・文化―春日井における街道と鉄道の歴史・地理について考える―」（2011年10月）、「林金兵衛とその時代―幕末・維新期の春日井―」（2012年1月）、「小牧・長久手の戦いと尾張東部」（2012年12



シンポジウムの様子

月)など、歴史学・地理学専攻に所属する教員を中心に、春日井地域や他大学の研究者を招き、参加者とともに議論を交わしました。

これら春日井地域を対象としたシンポジウムには、春日井市民を中心に毎回80名近い参加者があり、私たちの専攻に対する地域・市民からの期待を実感することができました。

### これからの歴史学・地理学専攻 ―私の夢―

最後に、以上のような専攻開設から6年間の教育・研究活動を踏まえ、これからの歴史学・地理学専攻の方向性について私の夢を語ってみたいと思います。

既に述べたように私たちの専攻の教育目標は、歴史学と地理学という二つの学問から、時間軸と空間軸を意識して過去・現在における人間の活動や社会現象を把握する人材を養成することにあります。ここでの「時間軸」は歴史学を、「空間軸」は地理学を象徴していることは明らかです。問題は、時間認識と空間認識の統合ないしは融合といういわば研究の方法論です。ちなみにこの研究方法が如何に有効であるかは、「歴史認識のズレ」を空間から読み解いた次に掲げる山元貴継先生の文章をお読み下さい。

私たち歴史学・地理学専攻に所属する教員は、歴史学、地理学それぞれの立場からこの「時間認識と空間認識の統合」という教育目標を常に意識して活動を展開してきました。しかし、極端な言い方をすれば、院生に対して歴史学を通じて時間認識を、地理学を通じて空間認識の養成を行い、後は院生自身にその統合を期待するという、いわば待ちの姿勢だけでは不十分なのではないでしょうか。

そこで私が提案したいのが、教員自身も研究活動を通じて時間軸と空間軸を統合した学問の方法論を鍛えていくこと、言葉をかえれば教員自身の学問の方法論を進化させる営みを共同作業として実践することです。

実は先ほど紹介した2011年と2012年に開催してきたシンポジウムは、歴史学・地理学専攻が開設された2008年から2009

年にかけてスタッフ一同で実施してきた研究報告会を出発点とし、2010年4月の後期課程設置に向けて開催したシンポジウム「21世紀新時代の世界理解―歴史学、地理学からのアプローチ―」（2009年7月）を基礎に開催されたという歴史的な経緯があります。

この点を踏まえれば、2011年以降のシンポジウム企画には、歴史学と地理学の方法論から「21世紀新時代の世界理解」を具体化するために、春日井を対象とする地域研究を核にしつつ、地球的規模で展開する現代社会を見通そうという中長期的な視点が確実に含みこまれていたと私は理解しています。

この点を継承し、私たち教員が春日井地域を単に分析・研究の対象とするのではなく、時間軸と空間軸を統合した学問の方法論を鍛える場と位置づけ直し、その上で共同研究を立ち上げ、研究の初発段階から方法論を含めた様々な議論を重ねながら、専攻固有の方法論にまで高めていく、そのような創造的な共同作業を専攻として着手してみたいというのが、現在の私の夢です。

### おわりに

繰り返しになりますが、以上の内容はあくまで私個人の夢であり、専攻全体として構想を示したものではありません。もちろん学問の方法論を構築するには、長い期間にわたる試行錯誤が必要です。またそのためには時間と労力も必要です。しかし、歴史学・地理学専攻の院生もこうした教員が試行錯誤する場に参加することで、私たちが掲げる教育目標に到達することができるのではないのでしょうか。

専攻開設から6年。過去を検証し、現状を把握し、未来を展望するためには、ちょうど良い時期といえます。次なるステップを目指して、まずは第一歩を踏み出したいと考えています。





Profile

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻准教授

山元 貴継 (YAMAMOTO Takatsugu)

2002年名古屋大学大学院文学研究科史学地理学専攻博士後期課程修了。博士(地理学)。専門は歴史地理学・文化地理学で、日本統治時代におけるアジア各地の農村の変化のほか、アジア各地のサブカルチャーの実態を研究。さらに、この東海地方のサービス文化についての追究も。著書に『都市の景観地理 韓国編』(共著)、『現代韓国の地理学』(共著)、『名古屋の“お値打ち”サービスを探る』など。



## 日本の「歴史認識」とアジア各国の「歴史認識」

—アジア各地でのフィールドワークの経験から—



### はじめに

ここ数年、依然として日本とアジアとの間では、「歴史認識」をめぐる、不穏な空気が漂っている。アジア各国から日本に向けては、戦争責任やそれに伴う賠償を求める動きが続いている。それに対して日本においては、多くの人々が、アジア各国が想定している歴史には確証が持てない部分が多く、とくに日中戦争や日本による植民地支配などによって生じたとされる被害に関する主張は過大なものとなっていて、到底受け入れられないという態度を示しているとされる。

このような日本とアジア各国との「歴史認識」のすれについて、残念ながらインターネットなどでは、その対立を煽る過激な意見すら飛び交っている状況にある。そこで筆者は、韓国や台湾のとくに農村地域でフィールドワークを行っている地理学研究者として、こうした「歴史認識」をめぐる考えさせられていることを紹介しつつ、歴史学と地理学とをともに学ぶことの意義を考えたい。

### 植民地支配にみられる「地域差」

たとえば、韓国の歴史教科書などにおいてひところ強調されていた内容として、「日本は朝鮮半島の土地の約4割を所有するに至った」との記述があった。こうした記述は、植民地時代に日本人が大挙して朝鮮半島に乗り込み、現地の土地を奪っていったイメージを与える。そこで、現地で実際に資料を確認すると、確かに開港地などで、その土地のほ

とんどが日本人の所有となっていた都市がみられる。しかし、当時朝鮮半島の大部分を占めていた農村地域に向かうと、土地所有者として日本人はなかなか登場しない。すなわち、植民地支配にはかなりの「地域差」があったといえる。特定の地域だけを取り出し光を当てると、いくらかでも「植民地支配は過酷であった」と強調することが可能となるのである。

同様に、植民地時代の日本人と現地の人々との関係についても、現地調査を行うと「地域差」を感じるようになる。当時、多くの日本人がアジア各地を闊歩していたイメージがあり、確かに朝鮮半島だけでも百数十万人規模の日本人が居住していた時期があったとの計算がある。しかし、農村地域で聞き取り調査を行うと、多くの地域で、当時を知る住民の記憶に残っている日本人といえ、せいぜい警察官と学校の先生、そのほか数家族というレベルでしかないことが多い。数十年に亘った植民地支配とはいえ、アジア各地の隅々まで日本人が「進出」することは容易なことではなかったと思われる。

### ふれてはいけなかった「空間」

かといって筆者は、植民地支配を肯定するつもりはない。現地調査ではやはり、「日本

人がやってきて…」のお話を聞く機会がある。例えば、筆者が調査を行っていた韓国中部の地方都市郊外では、「日本人が山に登って行き、自分たちのものにした」という話が伝わっていた(山元 2000)。調査では当時の一帯の土地取引も確認しているので、確かに、現地の方の所有であった山の斜面の一部(写真1)が、金融機関の「抵当」となってしまったことが明らかとなる。しかし一方で、その山の麓にあった広い面積の水田などが日本人個人の所有地になってしまっていたことについて、住民の関心はほぼなかった。その山の斜面については、「抵当」に入ったことでおそらく確認のため測量に入った人々がいた可能性があるが、面積的にはさほど大きくないその斜面のことが強烈に印象に残ったと思われるのはどうだろうか。

種明かしをすれば、山々の連なりには「気が流れている」と認識し、条件の良い山々の斜面に一族代々の墳墓を築く習慣を根強く残してきた朝鮮半島では、稜線上に列状に、下方に向け順々に子孫の墓地を設けていくことが多い(図1)。われわれ日本人などにとってはちょっとした山の斜面の一部に手を付けただけのことであっても、現地の人々にとっては、大切な墓地のための空間を途中で断ち切られてしまったことになるのである。これ



写真1 韓国・清州市郊外の山々に囲まれた集落(この右手が問題の「斜面」)

歴史学・地理学

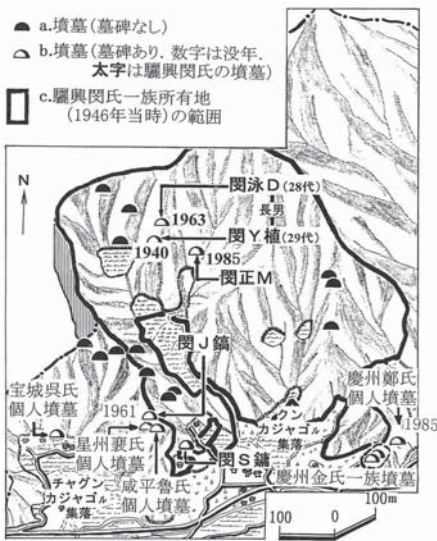


図 写真1の周囲の山々における墓地の造成

は、例えて言うならば、神社の境内に、外国人にすかずかと入られてしまったような気持ちであろうか。

このように、いわゆる「植民地支配」への現地の認識というのは、面積や金額の大小、被害者数の多少だけでなく、それが「どのような空間と関わっていたのか」に大きく左右される可能性がある。そうした「歴史認識」の相違の発生への追究に、興味を持ちたい。

「言語」の壁

ほかに、言語の違いという背景も挙げられる。よく知られているように、日本語と中国語は「漢字」を共有（厳密に言えば字体は大きく異なるが）しているものの、語順など文法は大きく異なる。一方、日本語と韓国語は、後者における「ハングル」と呼ばれる朝鮮半島の民族文字の存在により、一見すると大きく印象を異にする言語に映るものの、実は文法的には驚くほど似通っている。しかしながら、こうした言語どうしの違いも、「歴史認識」のずれに関わっているように思われる。

日本語は韓国語と比べると、「受け身（受動態）」表現が非常に多い言語である、ということ、意外に感じられる向きもあるかもしれない。韓国語にも「受け身」表現は存在しないわけではないが、多くの動詞について「受け身」表現は作りやすく、また作れたとしても、日常生活においてさほど使わないのである。例えば、日本でのマンガなどでのセリフ「お菓子を食べられちゃった」は、韓国で翻

訳出版されるときには「誰かがお菓子を食べてしまった」となる。そして、これは単に「受け身」表現がひっくり返されているだけではない。日本語で多用される「受け身」表現は、実は、あえて「主語」を立てずに主体をぼかす効果を持っている。「食べられちゃった」と言えば、今さら犯人を追及してもしょうがない、むしろ、そんな他人が食べてしまうようなところに置いておいた自分が悪い、というニュアンスもあるように思える。狭い島国日本、そんなに犯人捜しをしていたらギスギスする、といった「共通理解」があるのではなかろうか。

一方で、大陸と繋がる半島に位置した韓国などでは、悠長にしていたら国土が他者の手にわたってしまうかも知れないという長年の歴史を抱えてきた。常に「自分が」「相手が」を意識した精神世界を積み重ねているように思える。主体をはっきりさせ、ストレートに相手に感情を伝える物言いは、韓流ドラマの人気を後押しする数々のセリフを生み出している可能性もある。代わりに、日本人が多用する「主語」を省略した表現は受け入れられにくい。「植民地支配された」のではなく「日本が植民地支配した」、そして「徴用された」ではなく「日本が（強制的に）徴用した」と理解したいのである。これでは、日本側が行っている植民地統治などに関する説明の多くは、自ら（日本）の責任をぼかそうとしているように映ってしまう。

おわりに ー対話に向けてー

ここまで、日本の「歴史認識」とアジア各国の「歴史認識」とのずれが大きくなる要因について述べてきたが、現地でのフィールドワークからは、そのずれを少しでも埋めていくための方向性も感じることができる。アジアにおいて日本への反発を示す人々の多くは、まさに反日教育で日本に関する情報を多く得てしまいがちで、日本人個人とは全く接したことの無い戦後生まれの年配の方々や、メディアなどだけで過激な情報を得てしまいがちで、やはり日本人とは直接接したことの無い若者に多くみられる。しかしながら、多くの研究が指摘するように、アジア各国の人々は、国家としての「日本」に対しては得体的な知れない反発を抱えていることが多いも

の、直接対面した日本人個人に対しても強烈な反発を抱くとは限らないのである。

とすれば、日本の人々とアジア各国の人々とが直接対話する機会が増えれば、相手の国の人々に対する反発を持つ人々が少しずつ減少することが期待される。相手国の文化や風習を知る人々が増えれば、自身の何気ない言動が相手国の人々の反感を招くかもしれない、ということを理解できる人々が増える。お互いの言語について知る人々が増えれば、相手国の物言いの一つ一つに腹を立てる人々が減るであろう。

こうした方向性に期待して、歴史地理学科の学部生向け授業であるが、1年生春学期で最初に受講してもらった「日本とアジア(地理)」では、半年かけて日本とアジアの地理的条件の違いについて考えてもらっている。自然地理学概論をベースとし、島国日本と、大陸またはそれにつながる半島の国家である中国や韓国とでは、近接していても自然条件などが大きく違い、結果として積み重ねてきた歴史もどうしても異なってしまう、という内容である。こうした理解のもと、歴史学・地理学専攻の大学院生にも、一方的に「アジアの人々が主張する歴史は完全におかしい」とせず、日本の歴史とアジア各国の歴史とをそれぞれ考えてもらいたいと願っている。

また授業外であるが、筆者が引率して毎年行っている韓国巡検でも、毎回数名ずつの学生たちが初めて日本を出て、ぎこちないながらも現地の方々とは会話しようとする姿を見ている(写真2)。最初は観光旅行でも構わない。国を超えた、生身の人間どうしの交流が今後拡大していくことに期待したい。



写真2 恒例の韓国巡検

引用文献

山元貴継(2000)日本統治時代における韓国地方都市郊外の空間的変容 一忠清北道清州の事例一. 地理学評論73a-12. 855-874.



Profile

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻准教授

水野 智之 (MIZUNO Tomoyuki)

1999年名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程史学地理学専攻単位取得満期退学。専門は日本中世史。2001年、「室町時代公武関係の研究」で歴史学博士（名古屋大学）取得。高千穂大学商学部准教授を経て現職。近著に『戦国期の一方向一揆と真宗』（吉川弘文館、共著）、『生活と文化の歴史学3 富裕と貧困』（竹林舎、共著）など。



## 中世日本の政治と権力の研究から



### はじめに

最初に自らの研究領域や史料調査などを紹介し、今後の研究の方向性を述べます。次に大学院での教育について触れ、歴史学・地理学専攻としての将来の構想を展望します。

### 中世日本の公武関係

公武関係とは、朝廷（公家勢力）と幕府（武家勢力）、あるいは天皇と将軍の関係を指します。日本史学において公武関係と言えば、かつては朝廷と幕府が並び立つ中世国家をどのように捉えるかという問題関心により、平安末期から鎌倉時代の政治史が議論の主要な場であったと思います。

室町時代は鎌倉時代の延長線上に見なされ、研究が遅れていましたが、拙著『室町時代公武関係の研究』（2005年）ではこの時代の公武関係についていくつかの論点から検討しました。従来より、日本の国家のあり様は中国・朝鮮といった東アジアの諸国、あるいはヨーロッパ諸国と大きく異なっていると指摘されています。それはアジア型の王朝国家（例えば中国）を模した古代的政治権力の後身である朝廷と、ヨーロッパの封建社会に類似した封建権力である幕府という異質な編成原理に基づく政治権力が同時に併存したという特異性を備えていることです。この点を考察することは、日本の歴史を東西各国の歴

史と比較し、現在に至る日本の国家や社会の特質を相対的に把握する上で有意義であると考えます。将来は日本と西洋・東洋との比較から、国制や法制のあり様について研究を進めてみるつもりです。

### 朝廷と幕府の発給文書

日本の国制や法制を相対的に考察することは重要な研究課題ですが、学界の状況として中世後期では朝廷や幕府の政治動向に関して基礎的な研究が十分に進んでいません。室町時代の朝廷や幕府の発給文書はまだ整理されておらず、現在に遺されている文書全体を編年で整理した資料集も刊行されていません。私はこれまで主に日記や編纂物といった古記録の分析から研究を進めてきましたが、文書を収集して考察する必要性を感じています。

朝廷や公家の史料では、2009～2012年度に文部科学省科学研究費・若手研究（B）「室町～江戸初期における朝廷・天皇・公家衆の発給文書と政治的動向」が採択され、朝廷・天皇の発給文書と、摂関家や清華家の史料を収集・整理しました。東京大学史料編纂所、国立公文書館、宮内庁書陵部、国立歴史民俗博物館などから多くの文書を筆写・収集しましたが、未だ十分に確認しきれておらず、全体的な考察はできていません。

武家の史料では、室町幕府の発給文書（御判御教書・御内書・管領奉書など）を収集・

整理します。初代将軍足利尊氏から6代将軍足利義教の執政期あたりまでは多くの文書を確認していますが、それ以降は不十分なので、15代将軍足利義昭の時期まで収集する予定です。

天皇・朝廷と幕府の発給文書を収集したら、室町時代を通じて、どのような人々がいかに連携して政治的な集団を形成していたのか、その推移を明らかにし、併せて各地でなされた戦乱の原因などを究明します。応仁の乱以降、将軍家は二分して対立したので、各地の大名がその争いにいかに関わっていたのか、天皇、公家衆はどのような立場にあったかを具体的に究明し、従来の政治史を深化させていくつもりです。



シンポジウムの様子

### 東海地域史

これまでいくつかの自治体史の編さんに従事してきましたので、その経験をいかして、東海地方の地域史研究を進めていきます。愛知県下では、史料所蔵者別の資料集しか刊行

## 歴史学・地理学

されていませんでしたが、2001年に刊行された『愛知県史 資料編8 中世1』によって初めて編年の資料集が刊行されました。現在では古代から織豊期（1600年）までの編年の資料集が刊行され、史料の検索が容易となりました。地元の歴史に深い関心を寄せる人々だけでなく、生涯学習や学校教育の現場でも使いやすい資料集として好評を得ています。

『新編安城市史 資料編 古代・中世』の編さんでは、掲載史料に読み下し・語注・解説をつけ、理解の便宜をはかりました。当時、このような説明を施す自治体史は全国的に見ても数例しかありませんでした。史料の読み下しや解説の執筆は多くの労力を要しますが、自治体史編さんの事業を通じて、人々に新たに解明された史実を提示しつつ、ともに東海地域の歴史的展開を考察していきたいです。

室町・戦国時代の守護斯波氏の活動や一向宗の展開から、東海地域は北陸との結びつきが深いので、余力があれば、北陸を含む中部地域の歴史を一体的に読み解けるように目指します。個人的には全国統一を果たしていく織田、豊臣、徳川といった大名がなぜ東海地域から生まれたのかといった、東海地域の特質などに迫っていければ、と考えています。

## 大学院における教育

教育の目標は講義や演習を通じて、院生が現在の価値観にとらわれずに、従来にない新たな歴史像を発見でき、視野の広がる喜びを実感してもらうことです。史料を読解する演習では、新たに発見した内容を論文にまとめて学術雑誌に掲載できる水準に達することを目指しています。また、未活字史料の翻刻・発表も院生にさせてみたいところです。

前近代の日本史を学ぶ院生には時々見受けられることですが、自分の研究が現代社会においていかなる意味をもつのか十分に意識していないことがあります。それは現代社会に対する問題意識を十分に備えておらず、その克服への考察も取り組んでいないために、も

たらされています。

問題意識を高めるためには講義や演習を通じて、どのような課題を設定して史料を読み解いていくか、その営みの社会的な有用性を備えるように意識させていくことが重要です。このことは中世史の分野ではなかなか難しく、あまり強要すると逆効果になりますが、自由・平等・平和・ジェンダーなど諸々の問題について、現代社会との連関を強く意識させる機会を意図的に設けてもよいのではないかと考えています。

その上で、現時点の最新の研究成果から、どのような問題点や課題があるのかを発見させ、新たな歴史像を打ち出す構想力をしっかりと身につけさせたいと考えています。論理の構築や文章の表現力を高め、将来を担う社会人として、大学院で歴史学を学んだことが自分の人生にとって、非常に有意義であったと実感できるような教育を心がけて実践していきたいです。

## 歴史学・地理学専攻の展望

歴史学と地理学は時間の推移と空間のあり様を捉える上で密接な関わりがあり、地域を分析・把握する上で非常に有効な学問と言えます。人文学部歴史地理学科では、歴史と地理を同時に学ぶという他大学にはないカリキュラムが展開されており、両者の視点から対象を分析する方法論を培うことが可能です。

本専攻はその視点をさらに発展させる研究教育機関であり、これまでになく独自の研究方法を構築する可能性を秘めています。本専攻は歴史学・地理学の各領域の研究者がそろっているため、院生にはその専門的知識・技能を大いに吸収し、分析能力を高めていくことを期待します。

そのために教員自らが専門の枠にとらわれずに、他の研究領域との交流によって、新たな研究成果を打ち出していく姿勢を院生に示していくことは重要なことでしょう。他の専門領域の院生の研究活動に参加させてもらい、議論などをしたりして、お互いが研究の

接点を見出し、そこから問題を共有して考察に及んでみるという機会を増やすことも時には必要であると思います。そのような機会を設けることは独創的な研究の開発・進展に役立つでしょう。私自身も大学院で地理学を十分に学ぶという経験がなく、歴史学と地理学の方法を用いながら分析する手法を十分に身につけておりません。よって、自分自身も知識を深めていく必要があります。



豊田市史編さんに伴う史跡調査

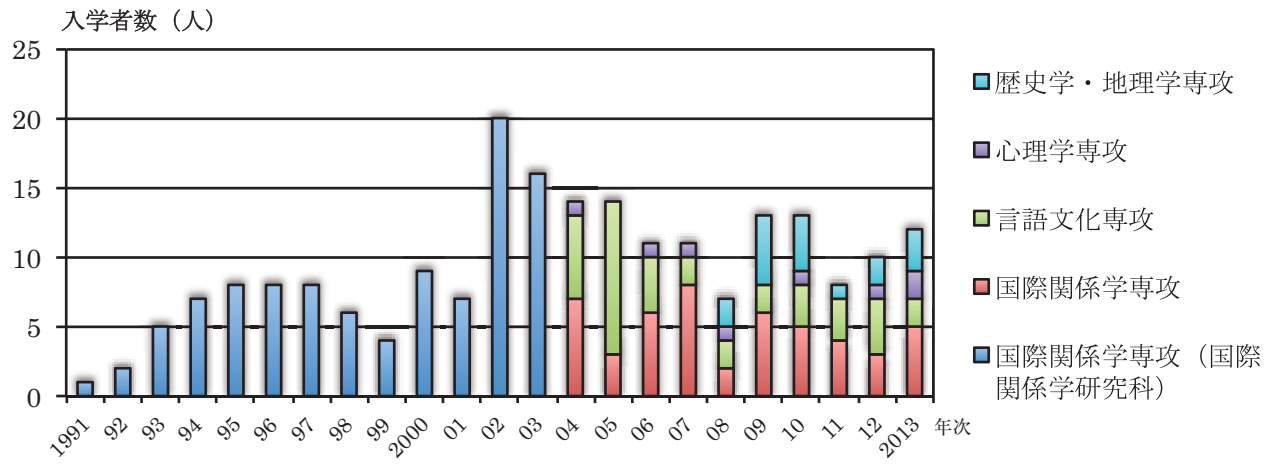
地図から歴史を読み取る方法論や、GISを用いた地域の歴史的な推移の復元、歴史学・地理学の方法論を取り入れた地域調査の新たな方法論の構築など、これまであまり行われていない学問の方法を本専攻で学んだ院生が構築し、新知見をもたらしてくれたら、非常に嬉しく思います。

本学には理系の学部があり、多くの研究者と研究施設に恵まれています。本専攻で学んだ院生がそれらをも大いに活用し、その知識や技能を用いてよりよい社会を創造してくれたら、嬉しい限りです。将来の展望としては、地域を分析する有効な方法論を新たに構築していく研究の拠点として、本専攻が学界や世間に認知され、社会で活躍する有望な人材を数多く輩出していくことです。それを早く実現できるように努力する次第です。

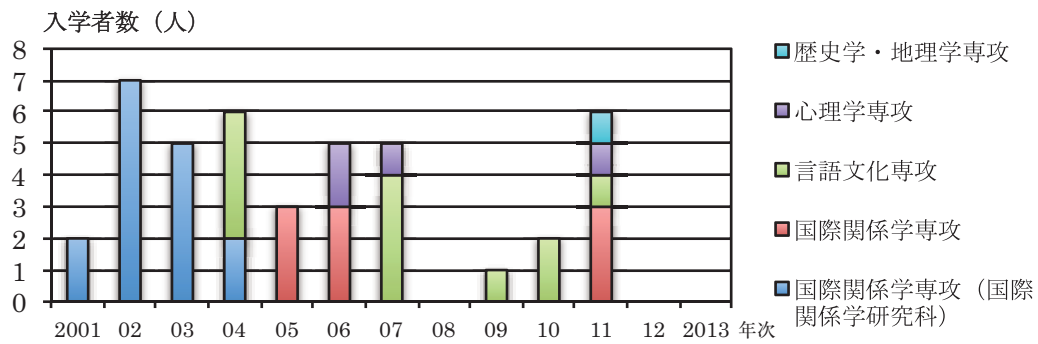
## おわりに

以上、自らの研究や教育、本専攻の展望について述べました。大学院で学ぶには学部生のときから真剣に学問に取り組むことが重要です。そのような熱意のある学生が多く集まってくれることを祈念しています。

## 入学者数の推移



国際関係学研究科・国際人間学研究科博士前期課程入学者数の推移



国際関係学研究科・国際人間学研究科博士後期課程入学者数の推移

### 院生の入学歓迎会(2013年4月)



## 留学生の在籍人数

### 2011年度

国名・地域名	前期課程					後期課程					合計
	国際関係学	言語文化	心理学	歴史学・地理学	小計	国際関係学	言語文化	心理学	歴史学・地理学	小計	
中国	5	3			8	4	2			6	14
ネパール	1				1					0	1
合計	6	3	0	0	9	4	2	0	0	6	15

### 2013年度

国名・地域名	前期課程					後期課程					合計
	国際関係学	言語文化	心理学	歴史学・地理学	小計	国際関係学	言語文化	心理学	歴史学・地理学	小計	
中国	2				2	3				3	5
ネパール	2				2					0	2
ベトナム	1				1					0	1
チュニジア		1			1					0	1
合計	5	1	0	0	6	3	0	0	0	3	9

### 学位授与式での記念写真



### 楽しくもあり、厳しくもあり(修士論文発表会・歓迎会)



# 中部大学国際人間学研究科

国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の各専攻は、文化的、歴史的基盤にたちながら、国際社会でコミュニケーション能力や関係構築能力が十分発揮できる人材、あるいは人間、社会、地域の本質を把握し、柔軟に行動できる人材を総力を挙げて育成します。



## 国際関係学専攻

### 科目【博士前期課程】

#### 国際政治経済研究コース

政治経済研究特論/国際法特論/国際政治学特論/国際経済学特論/国際機構論/応用計量経済学/国際金融論/国際協力論/開発経済学特論/開発ガバナンス論/発展途上国論/国際社会開発論

#### 国際社会文化研究コース

社会文化研究特論/文化人類学特論/国際社会学特論/観光人類学特論/国際ジェンダー論/比較文明論/比較環境論/比較社会史論/比較宗教論/ヨーロッパ社会文化研究特論/アメリカ社会文化研究特論/中東・アフリカ社会文化研究特論/中国・アジア社会文化研究特論/国際比較文明論/地域言語特殊研究

#### 共通科目

研究方法論/臨地研究論/近代世界表象体系

#### 特別研究

研究指導/課題指導

#### 研究科共通

日本語論文の書き方

### 科目【博士後期課程】

国際政治経済学専門研究演習

国際社会文化論専門研究演習

国際比較文明論専門研究演習

## 心理学専攻

### 科目【博士前期課程】

#### 心理学科目群

心理学研究法特論/知覚心理学特論/健康心理学特論

#### 学校心理学科目群

認知心理学特論/社会心理学特論/発達心理学特論/臨床心理学特論/教育心理学特論/学習指導法特論/学校教育特論/障害児心理学特論/生徒指導特論/心理検査法特論/学校カウンセリング特論/教育統計学特論

#### 特別研究

研究指導/課題指導

#### 研究科共通

日本語論文の書き方

### 科目【博士後期課程】

学習心理学専門研究/教育心理学専門研究/認知心理学専門研究/臨床心理学専門研究

## 言語文化専攻

### 科目【博士前期課程】

#### ジャーナリズムコース

研究基礎(情報収集、メディア・クリエイティビズム)/現代国家・制度特論/現代史特論/情報産業・流通特論/現代社会特論/社会心理学特論/情報技術とメディア特論/ジャーナリズムと倫理特論/現代の広報特論/報道記事作成技法/ドキュメンタリー作成技法/プロジェクト/研究指導

#### 英語圏言語文化コース

応用言語学特論/英語教育法特論/英語学特論/英米文学特論/英語圏言語文化総論/研究指導

#### 日本語日本文化コース

日本語学特論/日本語教育学特論/古典文学特論/近代文学特論/日本文化特論/伝承芸術特論/日本芸能特論/国語教育特論/研究指導

#### 共通

近代世界表象体系

#### 研究科共通

日本語論文の書き方

### 科目【博士後期課程】

メディア・コミュニケーション専門研究

英語圏言語文化専門研究

日本語文化専門研究

## 歴史学・地理学専攻

### 科目【博士前期課程】

#### 歴史学コース

日本古代史特論/日本中世史特論/日本近世史特論/日本近代史特論/日本現代史特論/アジア史特論/中国史特論/ヨーロッパ史特論/アメリカ史特論/社会経済史特論/思想史特論/文化史特論/技術史特論/美術史特論/歴史学研究

#### 地理学コース

経済地理学特論/産業地理学特論/歴史地理学特論/文化地理学特論/都市地理学特論/地理情報学特論/都市政策学特論/自然地理学特論/地誌学特論/地理学研究

#### 共通科目

近代世界表象体系

#### 特別研究

研究指導


#### 研究科共通

日本語論文の書き方

### 科目【博士後期課程】

歴史学専門研究演習

地理学専門研究演習

- 
- 
- 発行：中部大学大学院国際人間学研究科
  - 編集者：林 上
  - 発行日：2014年2月17日
  - 〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200
  - 中部大学国際人間学研究科（国際関係学部事務室）
  - 電話：0568-51-4079（直通） ●ファクス：0568-52-1325
  - 電子メール：inkn@office.chubu.ac.jp
  - 国際人間学研究科ホームページアドレス：  
[http://www3.chubu.ac.jp/graduate/global\\_humanics/](http://www3.chubu.ac.jp/graduate/global_humanics/)